
魔法先生ネギま！～大空の翼～

紅の牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜大空の翼〜

【Nコード】

N8015W

【作者名】

紅の牙

【あらすじ】

神のミスで死んだ主人公は転生しネギまの世界で大暴れ？ヒロインは明石裕奈と近衛木乃香。主人公は一応チートです。タイトルと設定を一部変えました

プロローグ

「どこかの空間」

「此処はどこだ？」

目が覚めると、・・・は白い空間に浮いていた

「おお、目が覚めたか。」

すると、・・・の前に白い服を着た、爺さんと可愛い女の子が現れた

「一応、確認するぞ。お主の名前は何じゃ？」

「椎名翔だ。」

「ふむ、意識はちゃんとあるみたいじゃの。」

翔：「それより、あんたらは誰だ？」

「わしの名はゼウス。最高神じゃ。」

「その娘のアテナです。」

翔：「ゼウスにアテナ、っと言うことはあんた達は神様って事か。」

ゼ：「そうじゃ。」

翔：「つまり、俺は死んだってことか。それで、死因は？」

ゼ：「トラックとの衝突が原因じゃ。」

翔：「普通だな。」

ア：「実はあなたが死んだ原因は私なんです。」

翔：「どういうことだ？」

ア：「私が間違っ、貴方のことが書かれた紙をシュレッダーに入れてしまい、死ぬはずの無いあなたが死んでしまったんです。本当にごめんなさい。」

アテナが翔に頭を下げた

翔：「人は誰でも、間違いを犯す、それは神だって同じことだ。気にしてねえよ。」

翔はそうアテナさん言った

翔：「それで、これから俺はどうなるんだ？」

ゼ：「今回はこちらのミスじゃからの、お主を転生させようと思う。」

翔：「転生？あれか、今ある記憶を持ったまま、生きるってやつ。」

ゼ：「そう、それじゃ。それで、どこがいい？」

翔：「何処って？」

翔が聞くと

ゼ：「お主を転生させる世界じゃ。因みに漫画やアニメの世界にも出来るぞ。」

翔：「マジで！？そうだな。」

翔はこの世界にしようか考え始めた

翔：「じゃあ、『ネギま！』の世界で。」

ゼ：「いいだろう。それと、お主の願いを五つまで叶えてやろう。何が欲しい？」

翔：「一つ目は身体能力MAX。二つ目は家庭教師ヒットマンの超直感。三つ目は大空のリングVer.XとXグロブ。四つ目は武器の入った匣兵器を三つ、ボンゴレ十代目守護者全員のアニメル匣。バージョンはボンゴレギアで形態変化も可能。武器はは時雨金時、Gのアーチェリー、トンファアの三つ。四つ目は全ての波動とリング。リングは1つで全ての波動を出せるようにしてください。五つ目はコンタクトディスプレイとヘッドフォン、形状はシモンフアミリー偏に出てくるので。」

ゼ：「ネギまの世界なのに魔力は要らんのか？」

翔：「俺が欲しいのはリングの炎だけ。それに死ぬ気の炎のほうがいろいろと使えそうだし。」

ゼ：「では、ふん。」

最高神ゼウスが持っていた杖を振るうと、蒼い光が翔を包んだ。そして、光が止むと、翔の指にリングが装着されており、4つの匣、コンタクトディスプレイとヘッドフォンが浮いていた

ゼ：「準備はいいかの？」

翔：「ああ。」

ゼウスに言われ、翔は返事をした

ア：「ちよつと待ってください、お父様。」

いざ、ネギまの世界に行こうとしたらアテナさんがストップをかけ、翔の前にき、翔にキスをした

翔：「なつ、なつ・・・／＼／」

ア：「私の失敗を許してくれたお詫びです。」

アテナさんは笑顔でそう言った

ゼ：「では、今度こそさらばじゃ。」

そう言つと、翔はネギまの世界に転生した

「それから、14年後」

翔：「篠突く雨！！」

翔はで雨の炎を纏った時雨金時で鬼を切り裂いた

翔：「これで、終わりだな。」

翔は時雨金時を匣に戻した

翔：「（俺がネギまの世界に来て、もう14年か。早いもんだな、時が過ぎるのは。）」

タカミチ：「翔君、お疲れ様。」

翔が考えごとをしていると、タカミチ・T・高畑がきた

翔：「高畑先生。」

タカミチ：「今日の警備はこれで終わりだよ。帰って休むといい。」

翔：「はい。」

タカミチ：「それと、明日、学園長室まで来てくれないかい？ 学園長が君に頼みことがあるらしい。」

翔：「すげー嫌な予感がするんですけど。」

タカミチ：「はは。じゃあ、また明日。」

翔：「お疲れ様でした。」

そう言つと、翔は家に帰った。そして、物語が今始まる。

主人公設定

設定

主人公

名前 椎名翔

年齢 14歳

性別 男性

容姿 ボンゴレ？世・ジョット 髪の色は黒

身体能力はスパロボで現すと全ての能力がMAX（400）

詳細：ネギまの世界に來た転生者。明石祐奈とは幼馴染であり、好意を寄せてはいるが、祐奈をこっちの世界に踏み込ませないために告白できないでいる。小学生の時、父親に連れられ関西呪術協会に行き、木乃香と出会い友達になる。因みに鈍感で祐奈と木乃香の好意に気づいていない。魔法使いたちには『天空の戦士』と呼ばれられており、学園では高畑、学園長、エヴァンジェリンと互角に戦える。何気にエヴァに気に入られている

装備品

1、大空のリングVer・X Xグローブ ナッツはVG状態の

形態変化に加え、攻撃モード、防衛モードにもなれる

2、ヘッドフォン+コンタクトディスプレイ

3、大空の七属性の炎を出せるリング

4、武器の入った匣 武器は時雨金時、Gのアーチェリー、トンファー

5、ボンゴレ十代目の守護者全員のアニマル匣、バージョンはボンゴレギア。形態変化も可能

第1話

翔 side

翔：「ふう〜〜あ。」

朝日が当たり、俺は目が覚めた

翔：「今日もいい天気だね。さて、飯の準備でもするか。」

俺は布団からでて、着替え、朝食の準備をしていると

ナッツ：「GAO」

ナッツが俺の肩に乗った

翔：「おはようナッツ。よく眠れたか？」

ナッツ：「GAO!!」

返事をして、俺の頬刷りしてきた

翔：「さて、朝飯にするか。ナッツはいつも通り、俺特製のライオンフードな。」

ナッツ：「GAO」

その後、朝食を食べ終えた俺は、理事長室に向かった

「麻帆良学園・女子エリア」

翔：「何で、学園長室が女子校にあるんだよ。」

俺はナッツを肩に乗せて、早歩きで進んだ。それに周りの視線が痛い

翔：「学園長、椎名です。」

俺はドアのノックした

近衛門：「入って良いぞ。」

翔：「失礼します。」

俺が入ると、そこには妖怪がいた

翔：「（なんと見ても妖怪にしかみえないんだよね。）」

そんな事を思っていると

近衛門：「何かわし、今、馬鹿にされた気がするんじゃないか。」

翔：「気のせいだと思いますよ。つで、俺の呼んだ理由はなんですか？高畑先生からは俺に頼みごとがあるって聞きました。」

近衛門：「うむ、実は君に面倒を見て欲しい子がいるんじゃない。名はネギ・スプリングフィールド。英雄、ナギ・スプリングフィールド

ドの息子じゃ。」

翔：「英雄の子供の面倒ですか。何しに来るんですか？」

近衛門：「この書類に書いてある。」

翔：「どれ、どれ。」

俺は書類を受け取り読み始めた

翔：「・・・・・・・・」

書類を机に置き、頭を抱えた

翔：「何で10歳の子供に先生なんてさせるんですか。つか、此奴の勤め先、女子校じゃないですか！どうやって面倒を見ろって言うんですか。」

近衛門：「そこら編は、問題ない。お主を此処に通わせることにしたからの。」

翔：「はあ！？」

近衛門：「他の生徒、先生には共学の試験生と言っておるから大丈夫じゃ。」

翔：「・・・・頭痛くなってきた。」

近衛門：「それと、お主の住む場所は女子寮になったからの。」

翔：「ブチ！！」

リングに炎を灯し、Gのアーチェリーを出した

近衛門：「ふぉ！？」

翔：「じじい、覚悟は良いか？答えは聞いてない！！」

力を溜め、矢を放とうとしたとき

タカミチ：「学園長、高畑です。」

高畑先生が来たようだ

翔：「つち。」

俺はアーチェリーを匣に戻した

近衛門：「今、舌打ちしたの？取りあえず、入ってよいぞ。」

タカミチ：「失礼します。」

ドアが開き、高畑先生、神楽坂明日菜、赤い髪の子供、そして、
木乃香が入ってきた

近衛門：「麻帆良学園にようこそ、ネギ君。」

ネギ：「は、はい。初めまして、ネギ・スプリングフィールドで
す。」

明日菜：「学園長、一体どういことですか!？」

明日菜が学園長に質問をしている、間

木乃香：「久しぶりやな、翔君、ナッツ君。」

翔：「そつだな木乃香。元氣そうじゃねえか。」

ナッツ：「GAO」

ナッツが木乃香に挨拶すると、木乃香の頭に移動した。木乃香はナッツを頭からおろし、抱きついた

木乃香：「やっぱ、ナッツ君の抱き心地は最高や〜。」

騒いでいる明日菜を無視しながら俺達のはんびりと会話をしていた

ネギは明日菜と木乃香と同室に決まった

木乃香：「それで、おじいちゃん。何で、翔君がここにおるん？」

話が終わり、木乃香が学園長に質問した

近衛門：「先生から聞いておるように共学の話は知っておるの？」

翔君はその試験生じゃ。クラスは2-A。」

明日菜：「何で、こんな子供がうちの担任になるのよ。」

学園長：「HRの時間じゃから、行きなさい。」

そう言われ、俺達は学園長室を出て、クラスに向かった

木乃香たちは先に教室に入った

タカミチ：「それじゃあ、入ろうか。」

翔：「先生、このクラスの生徒はいつもあんなことをするんですか？」

俺はドアに黒板消しがセットされてることに気づき、高畑先生に聞いた

タカミチ：「まあね。」

高畑先生は苦笑いで答えた

ネギは気づいておらず、黒板消しにあたり、そのまま、仕掛けられていた様々なトラップに引っかかった

タカミチ：「椎名君、入ってきてくれ。」

高畑先生に言われ、俺は教室に入った。その時、全員が驚いていたが無視した

翔：「椎名翔です。共学の試験生として、転入してきました。よろしくな。つで、俺の肩に乗っかってるのは相棒のナッツだ。」

ナッツ：「GAO」

自己紹介したら、クラスが静かになった

翔：「（嫌な予感がする。）」

「かつこいい　！！」　「可愛いー」

クラスの女子が叫んだ。その後は、質問タイムによりHRは終わった

～昼休み～

翔：「疲れた、それに視線が半端ねえ。」

俺は机に倒れ込んだ、すると

祐奈：「久しぶりだね、翔。」

倒れ込んでると、祐奈が俺に声を掛けてきた

翔：「久しぶりって、この間あっただろうが。まったく、休みだつてのに、買い物に付き合わせやがって。」

祐奈：「気にしたら負けだよ。」

翔：「そんで、何の用だ？」

祐奈：「一緒にご飯食べよう。」

祐奈は弁当箱を持っていた

翔：「構わないけどよ、俺、弁当ねえぞ。」

祐奈：「大丈夫、翔のぶんもあるから。」

そう言うつと、祐奈は俺に弁当箱をくれた

翔：「何で、弁当箱を二つ持ってるんだ？」

俺が聞くと

祐奈：「昨日の夜、お父さんから電話があつてね、翔が此処に転入してくるつて教えてくれたんだ。」

翔：「それと、弁当箱に何の関係が？」

祐奈：「その、一緒に食べようと思って／＼／。」

翔：「はっ？何て言った？」

祐奈：「何でもない。それより速く行こう。」

祐奈は俺の袖を引っ張って歩き出した

翔：「引っ張るなつての。」

その時、俺は黒いオーラを出して俺達を見ている視線に気が付かなかった

第1話（後書き）

感想を待っています

第2話

翔 side

祐奈に連れられ、俺は屋上にきた。そこにはクラスメイトの3人がいた

まき絵：「ゆーな、遅いよ。」

祐奈：「ごめん、ごめん。」

亜子：「うん？なんや椎名君を連れてきたんか？」

アキラ：「本当だ。」

翔：「どうも。」

俺と祐奈はベンチに座り、食事を始めた

祐奈：「じゃあ、簡単な自己紹介しようか。」

まき絵：「まずは、私から。佐々木まき絵、新体操部に所属してるよ。よろしくね。」

亜子：「次はうちやね、和泉亜子や、サッカー部のマネージャーや。よろしゅうな。」

アキラ：「最後は私だね。私は大河内アキラです。水泳部に所属してるよ。よろしくね。」

翔：「丁寧にどうも。椎名翔だ、よろしく。」

俺達は簡単な自己紹介をした

まき絵：「ねえ、気になってたんだけど、祐奈と翔君ってどういう関係なの？」

翔：「俺と祐奈は幼馴染だ。」

「ええええ〜っ!!??」

翔：「そんなに驚くことかね。」

俺はおかずに幾つかを蓋に乗せて、ナッツに渡した

翔：「ちゃんとたべろよ。」

ナッツ：「GAO。」

ナッツは俺の肩から降りて、ご飯を食べ始めた

まき絵：「それにしても、変わった動物だね。」

まき絵がナッツに触ろうとしたとき

ナッツ：「GAO!!」

ナッツが吠え、まき絵は驚いた

まき絵：「え？え？」

翔：「悪いな、ナッツは自分の気を許した相手にしか、なつかないんだ。」

俺はそう言つて、ナッツの鬘を撫でた

祐奈：「ナッツ君の鬘やつぱり気持ちいいー。」

祐奈がナッツの鬘を撫でた

亜子：「なんで、祐奈には気を許しとるん？」

翔：「祐奈は俺の次にナッツとの付き合いが長いからな。まあ、この学園で懐いてるのは俺以外に祐奈と木乃香ぐらいかな。」

祐奈：「・・・なんで、そこで木乃香の名前が出てくるの？」

祐奈が鋭い目で俺を睨みつけた

翔：「昔、父さんに連れられて、京都に行ったことがあるんだよ。木乃香とはその時會つて、友達になった。ナッツも最初は懐いてなかったんだけど、木乃香のおっとりとしたところになついちゃったんだよ。」

祐奈：「ふん。」

翔：「何怒ってるんだ、お前？」

祐奈：「別に。」

昼休みを終えるチャイムが鳴り、俺達は教室に戻り、授業を受けた

～放課後～

翔：「何で、祐奈の奴、あんなに不機嫌だったんだ？」

俺は今日から住む、女子寮に向かっていた

翔：「一人部屋だといっただけだなー。」

そう呟いていると

ナッツ：「GAO」

翔：「どうしたんだナッツ？」

ナッツ：「ガウ、ガウ。」

翔：「危ない？何がって・・・おい？」

俺が言われた方を見ると、ウチのクラスの子が階段から落ちそうになっていた

翔：「つちい。」

俺は瞬動を使い助けようとしたが、その子の体が宙で止まった

翔：「うん？」

辺りを見回すと、ネギが魔法を使っていた

翔：「はあ、あのバカこんな人目の多いところで魔法なんて使
いやがつて。」

俺はため息をついたが

翔：「まあ、結果オーライとしておくか。」

その場を離れようとしたが、明日菜がネギを掴んでどこかに向か
った

翔：「明日菜の奴、見てたのかよ。しょうがねえな。」

俺は二人の後を追った。二人に追いつくと、ネギが明日菜の記憶
を消そうとしていた

翔：「（この魔力はやばいな。それにあいつ、自分の力をコント
ロールできてない。）つくそ、ナッツ、形態変化防衛モード（カン
ビオ・フォルマ モード・ディフェイザー）！！」

俺はXグローブをはめ、炎を灯し形を変えると、ナッツに指示を
出した

ナッツ：「GAOOOO!!」

そして、瞬動を使い二人の間に入り込んだ

二人：「え？」

翔：「？世のマント（マンテツロ・ディ・ボンゴレ・プリーモ）
！！」

俺のマントはネギの発動した魔法を打ち消した

ネギ：「椎名さん？」

明日菜：「あんた。」

俺はマントをナツツに戻し、ネギに近づき、拳骨を喰らわせた

翔：「このあほがー！！」

ネギ：「へぶうつ！？」

翔：「自分の力もコントロールできない奴が無暗に力を使うな！
！」

ネギ：「ご、ごめんなさい。」

ネギが涙目になっていた

翔：「まったく。それと、神楽坂。」

明日菜：「な、なによ。」

翔：「俺達の正体を教えてもいいが、それなりに覚悟しておけよ。」

俺もネギも普通の人が持つていない力を持っている。俺に関しては此処とは違う世界の人間だ、一般人のお前が首を突っ込めば、記憶を消されるか、もしくは死ぬぞ。」

明日菜：「っ！？」

翔：「だから、話を聞くな、興味本位じゃなく、覚悟で決めろ！！」

俺はそう言い、二人に背を向けた

翔：「ネギ。もし、神楽坂が話を聞きたいって言ったら、話してやれ。そして、お前が守れ、それが男の役目だ。」

俺は二人に手を振って、その場を離れた

翔：「っで、いつまでそうやって隠れて聞けるつもりだ、刹那？」

俺がそう言うと、茂みの中から刹那が出てきた

刹那：「気づいていたんですね。」

翔：「当然。何の用だ？」

刹那：「これから、ネギ先生の歓迎会をするので、呼びに来ました。」

翔：「そうか。・・・刹那、木乃香と話す気はないのか？」

刹那：「・・・私の役目はお嬢様の護衛です。」

翔：「昔あった時は、あんなに楽しそうに話していたじゃねえか。何があつたんだ？」

刹那：「・・・・・・・・」

翔：「俺にも言えないって事か。まあ、いい。だけど、一つだけ言っておくぞ。むき出しのままの刃じゃ、お前は誰も守れねえよ。」

刹那：「・・・覚えておきます。」

そついい、俺達はクラスに向かった

歓迎会では、クラスの皆がネギに質問をしたり、委員長がネギの銅像を渡したりしていた。ってゆーか、いつ作つたんだよ？歓迎会は終わり、俺は女子寮に用意された部屋でのんびりとしていた。その時、電話がきた

翔：「はい、もしもし？」

工：『椎名か。』

翔：「エヴァさん、どうしたんですか？」

工：『ちよつと、厄介な敵がきてな、私一人では収集が着かんから手伝つてくれないか？』

翔：「いいすつよ。じゃあ。」

俺は外に出たとき、嫌な予感がした

翔：「取りあえず、急ぐか。」

俺はXグローブを着け、リングの炎を灯し、形を変えると、炎を使い夜の空に飛び立った

暫く、進んでいると、大きな鬼を見つけた

翔：「あれか。一気に終わらせますか。」

ナッツ：「ガオ。」

翔：「え？誰かが追いかけてる？」

俺は鬼の近くを見ると、誰かが鬼に追いかけていた。その人物は

翔：「祐奈！？」

俺が驚いていると、鬼が祐奈に襲いかかろうとしていた

翔：「まずい！」

俺は人差し指につけているリングに炎を灯し、時雨金時の入った匣に炎を注入し取り出すと、右手に持ち、剛の炎で一気に祐奈と鬼

の間に入り、時雨金時で鬼の攻撃を防いだ

翔：「俺の幼馴染に触れるな！！」

第3話

祐奈 s i d e

ネギ君の歓迎会が終わった後、私は1人で寮に向かっていた。何時もなら、まき絵や亜子、アキラと一緒に帰るんだけど、今日は1人で帰りたい気分だった

祐奈：「翔はいつになったら私の気持ちに気づいてくれるのかな。」

私と翔の家は近くだったので、小さい時からよく一緒に遊んでいた。私は翔と一緒にいるのが好きだった。翔といると、何かに包まれるような気がするから

祐奈：「・・・翔の馬鹿」

すると、近くの茂みから光が漏れてきた

祐奈：「な、何!？」

私が驚いていると、茂みの向こうから、大きな剣を持った鬼が出てきた

祐奈：「っ!!」

その鬼を見た時、私の体が震え、瞬時に思った“怖いと”

私は寮に向かって走り出した。どれくらい走っただろうか？私はそれが解らないくらい夢中で走った。走ってる途中、何かに躓き私は転んでしまった

祐奈：「ううう。」

足を見ると、震えていた。そして、私の前にさっきの鬼が現れた

祐奈：「あ、ああ」

私は動こうとしたが、動けなかった。鬼は剣をゆつくりと上に掲げた

祐奈：「・・・」

私はあまりの恐怖に声が出せなかった。そして、剣が振り下ろされたと同時に目をつぶった。だけど、私を襲うはずの痛みが来なかった。私はゆつくりと目を開けると、目の前に両手に紅い手甲を着け、右手に日本刀を持った翔がいた

翔：「俺の幼馴染に触れるな！！」

祐奈 s i d e e n d

翔 side

翔：「おらあっ！！」

時雨金時を振るい鬼を吹き飛ばした俺は、直ぐに祐奈を抱え、鬼と距離をとった

祐奈：「翔、だよね。」

俺に抱えられていた祐奈が震えた声で聞いてきた

翔：「ああ。正真正銘、椎名翔さ。」

俺は祐奈を地面に降ろし、体を見、怪我がない事を確認すると、殺気を開放し、鬼をにらみ付けた

鬼は俺の殺気に振るえていたが、俺達に襲いかかろうと動き出した。だが、途中で鬼のう動きが止まった

翔：「アタック・デイ・スクアール 絞衝撃。さつき、お前の剣を受け止めた時に、衝撃破を流しておいた。さらに雨の炎も使った強化版だ。お前の神経は麻痺している。」

俺は時雨金時を匣に戻した

翔：「祐奈、ここで待ってる。直ぐに戻ってくる。」

そう言い、俺は一瞬で鬼に近づき、鬼を思いつき遠くに殴り飛ばした

俺は直ぐに空に飛び上がり、飛ばされた鬼を追った

鬼は森の奥に落下した

俺は地面に着地し、匣からGのアーチエリーを取り出した

麻痺が収まった鬼は俺に剣を振り下ろしてきたが、俺はそれをバックステップでよけると弓の弦を引いた

翔：「ガトリング・アロー！！」

小さな炎の矢を鬼の足に放ち、動けなくした

翔：「祐奈を怖がらせた貴様に、慈悲なんか与えねえぞ！！」

弦を引き、力を溜めた

翔：「果てろ、赤竜巻の矢！！」
トルネード・フレイム・アロー

竜巻のように回転した炎の矢を放ち、鬼を消滅させた

翔：「さて、祐奈の所に戻るか。」

鬼の消滅を確認した俺は祐奈の所に行こうとしたとき

エ：「相変わらず、すごい威力の矢だな。」

エヴァさん、茶々丸、そして茶々丸に抱えられた祐奈が空から降りてきた

翔 s i d e e n d

祐奈 s i d e

翔が殴り飛ばした鬼を追っていった後、私は翔の後を追おうとした。その時

工：「止まれ、明石祐奈。」

声のするほうを向くと、そこにはエヴァちゃんと茶々丸さんがいた

祐奈：「エヴァちゃん、それに茶々丸さんどうしてここに。」

工：「椎名翔の手伝いだ。だが、その必要もないみたいだがな。」

祐奈：「それより、どうして翔がいる場所に行っちゃだめなの。」

工：「アイツや私が住んでいる世界はこことは違う世界、非現実的な世界。平和とはかけ離れた世界だ。」

祐奈：「非現実的な世界。・・・翔はその世界で生きてるの?」

工：「ああ。平和の中にいるお前には過酷過ぎる世界にな。」

祐奈：「……………」

私は思った、どうして翔はそんな世界にいるのか

工：「見てみるか、椎名翔が生きている世界、その一部を」

祐奈：「翔の生きてる世界。」

工：「だが、一度見れば元の生活には戻れないぞ。」

祐奈：「……………」

私は悩んだ、翔のいる世界を見ようか、見ないか。数分悩んだ後

祐奈：「エヴァちゃん、私を翔のいる所に連れて行って。」

工：「……それが、お前の答えか？」

祐奈：「うん。」

工：「いいだろう、茶々丸。」

茶：「はい、マスター。」

エヴァちゃんの合図で茶々丸さんは私を抱えた

工：「行くぞ。」

私達は翔がいる場所まで飛んだ。そして、鬼と戦っている翔の姿

が見えた

工：「ほう、今日の獲物は弓矢か。」

翔：『ガトリング・アロー！！』

翔の放った矢が鬼の足に刺さり、動きを封じた

翔：『祐奈を怖がらせた貴様に、慈悲なんか与えねえぞ！！』

私はあんなに怒った翔を見るのは初めてだった

翔：『果てろ、赤竜巻の矢！！』
トルネード・フレイム・アロー

翔の放った矢に当たり、鬼が消滅した

祐奈：「す、凄い。」

私はそれしか言葉が思いつかなかった

工：「つぶ、相変わらずの威力だ。茶々丸、行くぞ。」

茶：「はい。」

茶々丸さんがゆっくりと地面降りていく

工：「相変わらず凄い威力だな。」

茶：「お疲れ様です、椎名様。」

祐奈：「・・・」

私は翔に何も言えなかった

第3話（後書き）

怒りの翔は怖いですね。ボンゴレ？世も怒ったら、翔みたいになるんですかねー？感想まっています

第4話

翔 side

鬼を倒し、祐奈の所に帰ろうとしたとき、空からエヴァさん、茶々丸、そして、茶々丸に抱えられた祐奈がいた

翔：「エヴァさん、何で祐奈がここにいるんだ？」

俺が聞くと

工：「私が連れてきた。」

翔：「……………」

俺はエヴァさんに殺気を当てた

工：「話は最後まで聞け、別に強制的に連れてきたわけじゃない。お前の生きている世界の一部を見たいかと聞いたら、見たいと言ったので連れてきただけだ。」

翔：「エヴァさん、俺の戦う理由は知ってますよね。」

工：「ああ。」

翔：「俺は、祐奈にこっちの世界に踏み込んで欲しくない、あの人がってそうだ。だから……………」

」

エ：「だとしたら、貴様の覚悟はその程度のものだという事だな。」

翔：「え？」

エ：「貴様と初めて戦ったとき、貴様はこう言っただな、『アイツを必ず守る。それが俺の戦う理由であり、俺の覚悟だ！』」つと。
なのに貴様は、その守ると決めたものに自分の住んでる世界を知られ、覚悟が無くなった。」

翔：「っ！！」

俺は胸の奥で思っていた事を言われ、驚いた

エ：「それに、明石祐奈には一部を見せたただけだ、戻る事も出来る。」

エヴァさんはそういうと、祐奈のほうを向いた

エ：「明石祐奈、これが私と椎名翔が生きている世界の一部だ。答えは明日聞く、こちらの世界に来るか、それとも今日の事を忘れるか。よく考えるんだな。行くぞ、茶々丸。」

茶：「はい、マスター。それでは、椎名様、明石様、また明日お会いしましょう。」

茶々丸は祐奈を降ろすと、先に歩いているエヴァの後を追って行った

翔：「……………」

祐奈：「……………」

俺と祐奈の間に沈黙が流れた

翔：「取り合えず、帰るか。」

祐奈：「うん。」

俺達は寮に帰ろうとした時

祐奈：「きゃっ」

祐奈が扱けた

翔：「大丈夫か？」

俺はかがんで祐奈に聞いた、足をよく見ると、震えていた

翔：「緊張が解けたんだな。」

祐奈：「う、うん。」

翔：「しゃーない。ほれ。」

俺は祐奈の前に移動し、しゃがんだ

翔：「乗れ、部屋まで連れてってやるよ。」

祐奈：「部屋までって、私が住んでるの女子寮だよ。」

翔：「そう言えば、言ってなかったな。俺も女子寮に住むことになったんだよ。今日からな。」

祐奈：「そうなの!？」

翔：「ああ。それより、早く乗れ。」

祐奈：「う、うん。」

祐奈は俺の背中にしがみ付いた、俺は両手で祐奈の脚を持つと、立ち上がり、寮に向かって歩き出した

祐奈：「その、重くない？」

祐奈が聞いてきた

翔：「全然、むしろ軽い。」

祐奈：「そっか。」

あまり、話をしないで歩いていると

祐奈：「そういえば、昔、よくおんぶしてくれたね。」

翔：「そうだったっけか？」

祐奈：「・・・翔。」

翔：「なんだ？」

祐奈：「もし、私が翔の生きてる世界に足を入れるって言うたらどうする？」

翔：「……勿論、力づくで止める。」

祐奈：「だよね。」

翔：「さっきまでは、そう考えていた。だけど、その考えは捨てた。」

祐奈：「え？」

翔：「エヴァさんの言うとおり、いつかはこういう日が来る事は知っていた。お前が俺の世界の事を知る日がな。だけど、俺は知って欲しくなかったんだ、お前に俺のいる世界のことを。」

祐奈：「……………」

翔：「祐奈、お前の好きにしろ。どんな結果になろうと、俺は文句は言わない。そして、お前に襲い来る全てのものから守ってやるよ。それが、俺の決めたことであり、俺の覚悟だ」

祐奈：「……ありがとう。」

そう言うと、祐奈は寝てしまった

そして、翌日

授業が終わると、俺は祐奈を連れて、エヴァさんの家に向かった

翔：「おじゃまします。」

工：「来たか。」

俺達が家に入ると、エヴァさんは飲んでいた紅茶を置き、祐奈に聞いた

工：「答えを聞かせてもらおう。」

翔 side end

祐奈 side

工：「答えを聞かせてもらおう。」

エヴァちゃんに聞かれ、私は言った

祐奈：「私は昨日のことを忘れない。」

工：「いいのか？忘れれば平穏な生活を送れるんだぞ。」

祐奈：「確かにそうかもしれない。でも、私はその世界で生きる翔の事を支えたいんだ。私に何が出来るかわからないけど。だけど、きっと私にも出来る事があるはずだから。」

翔：「……………」

翔は何も言わなかった

エ：「良いだろう、貴様の覚悟は理解した。」

翔：「エヴァさん、頼みたいことがある。」

エ：「言ってみる。」

翔：「祐奈を鍛えてください。俺のいる世界に来る以上、必要な事ですから。」

エ：「…………まあ、良いだろう。その代わり、私の頼みを1つ聞くことが条件だ。」

翔：「わかりました。」

祐奈：「えっと、よろしく願いします。」

私はエヴァちゃんに頭を下げた

エ：「だとしたら、まずは仮契約をしないといけないな。」

祐奈：「？」

私は首を傾げた

エ：「私のような魔法使いにはミニステル・マギと呼ばれるパートナーがいる、解り易く言えば私と茶々丸のような関係だ。ミニステル・マギの役割は、詠唱中に無防備になる魔法使いを守る事。」

祐奈：「ほうほう。」

エ：「仮契約するといくつかの能力が得られる。その中の一つがパートナーの存在能力を引き出すことができる固有のアーティファクトがある。目的はそれだ。」

祐奈：「アーティファクトって何？」

翔：「仮契約者専用の武器のことだ。」

祐奈：「ふーん。」

エ：「では、早速始めるぞ。茶々丸。」

茶：「はい、マスター」

茶々丸さんは床に何かを書き始めた

茶：「マスター、準備が整いました。」

祐奈：「エヴァちゃん、1つ質問。その仮契約ってどうやってやるの？」

私が聞くと

エ：「何、その魔方陣の上で、キスをするだけだ。」

祐奈：「キ、キス!？」

翔：「所で、エヴァさん。祐奈は誰と仮契約を結ぶんだ？」

翔が質問した

エ：「貴様に決まっているだろう。」

エヴァちゃんが翔を指差した

翔：「俺!？俺は魔力ゼロだぜ。」

エ：「別に魔力が無くても仮契約はできる。」

翔：「マジかよ。」

エ：「ほれ、さっさとやれ。」

エヴァちゃんは翔を魔方陣の中に入れた

祐奈：「えっと、私、絶対に強くなるからね、翔を支えられる位に。」

翔：「ああ。期待してるよ。」

そう言い、私達の唇が重なった。そして、魔方陣が輝き契約が完了した

祐奈：「一応、私のファーストキスだから／＼／」

翔：「奇遇だな、俺もだよ／＼／」

私達は顔を紅くして話していた

エ：「これで、契約は完了だ。後、これが契約の証だ、無くすな
よ」

エヴァちゃんは私達にカードをくれた

祐奈：「これがパクティオカード。」

エ：「修行は明日から始める、今日は帰ってゆつくりするといい。」

「

エヴァちゃんに言われ、私達は家を出、寮に向かった

祐奈：「翔。」

翔：「うん？」

帰る途中、翔に話しかけた

祐奈：「これから、よろしくね。」

翔：「っふ、ああ。」

第5話

翔 side

翔：「くそっ!!」

俺は現在、廊下を全速力で走っている。何故かって？それは

木乃香：「翔くん、まってゝな。」

「まってゝ。」

翔：「誰が待つか!!」

木乃香達に追われているからである。理由はさっき明日奈から、変な飲み物を無理やり飲まされ、女子と目を合わせたとたん襲ってきたからだ。明日奈とネギに何を飲ませたかと聞いた所、惚れ薬つと言っていた

翔：「あの馬鹿、本当に余計な騒動ばっか起こしやがって!こんな事なら、じじいの依頼断っておけば良かったぜ!!」

そんな事を言っていると、追ってくる女子のスピードが上がった

翔：「それより、何で運動神経が上がってるんだ!?あれか?恋する乙女に不可能は無いって奴か!？」

俺は屋上に出ると、服から匣を取り出し、リングに炎を灯した

翔：「開匣！！」

ボックスが開かれ、中に入っていたXグローブが俺の手に装着された。っえ？何でボックスに入っているかって？ボックスを整理していたら開いてる奴があったから入れたんだよ。この方が持ち運ぶのがラクだしな

Xグローブをつけると、俺は炎を噴射し、空に飛び上がった

翔：「いくらアイツ等でも、此处には追って来れないだろう。」

それから、俺は薬の効果が切れるまで、空に浮かんでいた。効果が切れたのは、それから10分後だった

～放課後～

翔：「疲れた〜。」

祐奈：「にやはは、お疲れさま。」

俺は祐奈と一緒にエヴァさんの家に向かって歩いていった。あの後、俺はネギと明日奈に制裁を与えた

エヴァさんの家にお邪魔すると

工：「来たか。それにしても翔、今日是不運だったな。」

翔：「人の心を操る薬や魔法は禁止だったのに。」

工：「坊やは回りにちやほやされて育ったからな。そこら偏のことは知らないんだろう。」

翔：「そういうのは学校で教わるもんだろう？」

工：「案外、聞いてなかったのかもしれないぞ。」

エヴァさんにそういわれ、俺は頭が痛くなった

翔：「今思えば、ナッツに頼んで薬の効果を消して貰えば良かった。」

祐奈：「頭が混乱していったって証拠だよ。」

工：「無駄話は此处までにして、行くぞ。」

祐奈：「行くって、どこに？」

工：「私の別荘にだ。」

翔：「やっぱ、あそこでやるのか。」

工：「当然だ。あそこ以外に適した場所は存在しないからな。」

エヴァさんの後に続いて、俺と祐奈は歩き出した。地下の部屋に

入ると、大きなミニチュアがあった。エヴァさんがそのミニチュアに近づくと消えたので、祐奈は驚いていた

俺は祐奈を別荘に近づかせ、先に中に入らせると、後を追うように俺も中に入った

翔 side end

祐奈 side

祐奈：「ほえ～～～～。」

私は口を大きく開けて啞然としていた

エ：「まずは、この別荘について教えておく。ここは外と時間の流れが違う。浦島太郎の竜宮城つてのがあっただろう。ここはその逆だ。ここで一日過ごしても外では一時間しか経過していない」

祐奈：「へへ。」

エ：「では、修行を始める。まずは、アーティファクトの出し方と、終い方だ。カードを手を持った状態で来い（アダアット）っと言え。っあ！その前にカードの名前を確認しておけ。」

私はエヴァちゃんに言われたとおり、カードを手を持った

祐奈：「えーと、五色の双銃ね。来い（アダアット）！！」

すると、カードが光、二丁の拳銃（形状はガンダム〇〇のビームピストル？）を持つち、両指に指輪を5つ、形、10個つけていた

祐奈：「おー、銃撃士みたいでカッコいい。」

翔：「うん、その指輪、俺のと似てないか？」

翔に言われ、私は指輪をみた

祐奈：「本当だ。」

エ：「ふむ、明石祐奈ためしに撃ってみろ。」

祐奈：「うん。」

私は誰もいない所に銃を向け、引き金を引いた。だけど、何も出てこなかった

祐奈：「あれ？」

翔：「でないな。」

祐奈：「どうしてだろう？」

エ「魔力を弾に変えるのかもしれないな。」

翔：「じゃあ、あの指輪はどう使った？」

3人：「うーん。」

私達3人が考えていると

翔：「それにしても、その指輪、俺のと本当にそっくりだよな！。」

祐奈：「う、うん／＼（これってもしかしてパールックって奴なのかな。）」

翔：「うん？待てよ？祐奈、指輪に力をこめてみる。」

祐奈：「込めろって言われてもどうやったらいいか解んないよ。」

翔：「それもそうだな。」

翔は再び悩みだした

祐奈：「ねえ、翔はどうやって、その指輪から炎を出してるの？参考にしたいから。」

翔：「俺の場合は、覚悟だな。」

祐奈：「覚悟？」

翔：「ああ。この指輪に炎を灯す方法はただひとつ、つけているものの覚悟。俺の場合は、お前を仲間を絶対に守る事。それが俺の覚悟だ。」

祐奈：「覚悟ねえ。」

私は少し考えた、私の覚悟って何だろう？そして、色々と考えてひとつの結論に至った。私の覚悟は、強くなつて翔を支える事。そして、どんな事が起ころうと一生、翔と共に生きていく事、それが私の覚悟

すると、指輪に炎がともった

祐奈：「炎が・・・ともった。」

私が感動していると

翔：「これは・・・間違いない、死ぬ気の炎だ。成る程な。祐奈、炎を出した状態で、銃を撃ってみろ。」

祐奈：「うん。」

私はさつきと同じ銃を構え、引き金を引いた。そして、赤い弾丸が撃ち出された

祐奈：「で、できた。」

翔：「やつぱりな。その銃の弾は死ぬ気の炎なんだ。祐奈、炎を出す時に決めた覚悟を忘れるなよ。」

祐奈：「うん。」

エ：「成る程、主人の力がそのまま従者の力になるとわはな、興味深い。よし、アーティファクトを一旦元に戻すんだ。やり方は、去れ（アベアット）だ。」

祐奈：「うん、去れ（アベアット）」

2丁の銃と指輪がカードに戻った

エ：「さて、明石祐奈、貴様の修行内容を伝える。まずは、体の動かし方について覚えてもらう、それが終わったら、アーティファクトを使った戦闘訓練だ。」

祐奈：「はい。」

エ：「体の動かし方については茶々丸に教えてもらえ。頼んだぞ、茶々丸。」

茶：「はい。祐奈さん、こちらに。」

私は茶々丸さんについて行った。これから、毎日が忙しくなるんだろうけど、絶対に強くなつて翔を支える。それが、私が自分で決めた事であり、私の覚悟だから

第6話

祐奈 s i d e

私が訓練を始めて、一ヶ月がたった。最初は茶々丸さんの動きについて行けなかったが、今では余裕とまでは行かないけど、着いていけるようになった

祐奈：「そこ。」

私は両指につけている指輪から、赤い炎を出した状態でトリガーを引き、赤い弾丸を撃ちだした

茶：「……………」

茶々丸さんはそれを避けると、私の前に移動し、足払いをした

祐奈：「きゃっ!」

私は地面に倒れた、茶々丸さんは拳を私の顔の前で寸止めしていた

茶：「此処までですね。」

祐奈：「参りました。」

私は銃を離し、手を上に揚げた

私の返事を聞き、茶々丸さんは私から離れ、手を差し出してくれた。私はその手を掴み起き上がると、床にある銃を拾い、カードに戻した

祐奈：「やっぱり、まだ勝てないか。」

茶：「それでも、ありませ。祐奈さんはこの一ヶ月でかなり強くなってきました。足りないのは戦いの経験ですね。」

祐奈：「ありがとう。お世辞でも嬉しいよ。」

私と茶々丸さんは、別の場所で修行をしている、翔とエヴァちゃんの所に向かった

修行場に着くと、

工：「魔法の射手、連弾・闇の10矢!!」

翔：「時雨蒼燕流 守式七の型・繁吹き雨!!」

エヴァちゃんが放った魔法を、翔が刀で回りに巻き上げた水で防御した（戦っているフィールドには、雨燕の水がある）

工：「つち、厄介な水だな。」

翔：「愚痴を言ってる暇があるのか？」

翔はエヴァちゃんの懷に飛び込むと刀身を地面（水）に入れ

翔：「時雨蒼燕流 守式二の型・逆巻く雨!!」

刀で水を巻き上げた

工：「これで視界を奪ったつもりか!!」

翔：「守式二の型から特式十一の型・燕の嘴!!」
ベッカタ・ディ・ローンディネ

工：「氷盾!!」

翔の連続の突きを氷の盾で防御するエヴァちゃん

祐奈：「この2人を見てみると、なんか自身をなくすな。」

茶：「仕方ありませんよ、マスターと翔さんはこの学園の中でも最強の部類に入っていますから。」

茶々丸さんの説明を受けていると、蒸気爆発が起こり、煙が止むと、お互いの首筋に刀と刃を寸止めしている2人がいた

翔：「引き分けだな。」

工：「そのようだな。」

2人は剣を引き、試合？はそこで終わった

工：「っふ、やはり貴様との戦いは面白いな。いい運動になった。」

翔：「それを言うなら、俺ですよ。俺とともに戦える人はエヴァさんかじじいぐらいですからね。」

私たちは一休みの紅茶を飲んでいる

祐奈：「そうだ！翔、質問があるんだけど。」

翔：「質問？」

祐奈：「うん。」

私はアーティファクトを呼び、リングの炎を灯して聞いた

祐奈：「この炎って一体どんな力があるの？茶々丸さんに聞いても解らないって言うし。」

エ：「そう言えば、私も聞いていなかったな。」

翔：「そう言えば、まだ教えていなかったな。エヴァさん、書くものありますか？出来れば、ボード系のが良いんですが。」

エ：「茶々丸。」

茶：「はい。少しお待ちください。」

エヴァちゃんに言われ、茶々丸さんはボードを探しに言った

祐奈 side end

翔
side

翔：「では、第一回『死ぬ気の炎』説明会を始めます。」

俺は茶々丸が持ってきた伊達眼鏡をかけてボードの前になっっている

翔：「まず、死ぬ気の炎の種類について説明しよう。」

俺はボードに文字を書き始めた

翔：「死ぬ気の炎には七つの種類がある。大空、嵐、雨、雷、晴れ、雲、霧の七つだ。」

工：「天候に関するものだな。」

翔：「これは大空の七属性って呼ばれている。次に属性にはそれぞれ特有の色がる。大空はオレンジ、嵐は赤、雨は青、晴れは黄色、雷は緑、雲は紫、霧は藍」

俺は属性の隣に色と書き、それぞれの色を書いた

翔：「炎には純度ってものがあって、純度が高くなるほど色は鮮やかになり、高純度な炎ほど属性の持つ特性をより強く引き出すことが出来る。」

祐奈：「特徴？」

翔：「待つてろ今説明するから。」

俺はボードに性質と書き、それぞれの特徴を書き始めた

翔：「炎にはそれぞれ、特徴があつてな、大空は調和、嵐は分解、雨は鎮静、晴れは活性、雷は硬化、雲は増殖、霧は構築。」

祐奈：「??？」

祐奈は首を傾げていた

翔：「解りやすく言うと、嵐の炎は使用者以外が触れると、細胞が分解され、傷が出来、雨の炎のに当たると体の動きを鈍らせる事が出来、晴れの炎は体の組織や細胞を活性させ、回復能力や体の動きを強化する、雷の炎は武器や弾丸に纏わせる事により、強度を強くする。例としては鎧に纏わせれば、防御力があがる、雲の炎は炎を吸収すると、さらに大きくなる、雲同士がぶつかりあい大きな雲になるだろう？それが例だ。霧の炎は幻を構築して本物を映し出す。大空の炎は全ての無効にすることが出来る。」

エ：「ほう、魔法に比べ種類が少ないが使い方次第では大きな力になるな。」

翔：「ああ。炎同士を合わる事もできるからな。祐奈、お前のリングからはどの炎がでた？」

祐奈：「え〜とね、嵐、雨、晴れ、雷、雲の炎が出たよ。中でも

嵐の炎が強いと思う。」

翔：「じゃあ、嵐をベースにして残りの炎と組み合わせてみな。それと、晴れの炎は使えるから、自分に撃って体を強化させみる。」

祐奈：「うん。」

工：「では、そろそろ修行を再開するか。・・・そうだ、来週から期末試験だから、その時は修行は無しとする、いいな。」

祐奈：「はい。」

翔：「俺は勉強しなくても問題ないんだけどな。」

祐奈：「だったら、私に勉強を教えてよ。そ、その、ふ、2人つきりで／＼／」

翔：「うん？最後何って言った？よく聞こえなかったんだが。」

祐奈：「な、なんでもない。」

その後、祐奈は顔を赤くして修行を再開した

第7話

翔 side

祐奈：「翔、ここはどうするの？」

翔：「そこは、……こうやって、こうするんだ。」

祐奈：「ほう、ほう。ありがとう。」

今、俺は祐奈に勉強を教えている。三日後に期末試験が始まるので、最後の追い込みだ

翔：「それにしても、うちのクラスはのんきすぎるだろう。いくらうちの学校がエスカレーター式だからって、勉強をしないのはどうかと思うぞ。」

祐奈：「うちのクラスは勉強が嫌いな人が多いからね。それに、バカレンジャーもいるし。」

翔：「何だ、そのバカレンジャーって？」

祐奈：「翔は来たばかりだから、知らないのは当然だね。バカレンジャーってのはね……」

祐奈は俺に説明してくれた

翔：「つまり、毎回最下位を取ってる明日奈たちをバカレンジャー
ーと呼んでいると」

祐奈：「うん。」

俺達が、話をしていると。外から、慌てた声が聞こえてきた

翔：「誰だ？こんな時間に。」

俺は窓を開けて外を見ると、うちのクラスののどかとハルナが慌
てながら走ってきた

翔：「2人とも、そんなに慌ててどうしたんだ？」

俺は2人に声をかけた

のどか：「椎名さん、祐奈さん」

ハルナ：「実は、バカレンジャーの皆とネギ君、そしてこのか
が、図書館島で行方不明に！！」

翔：「はあ！？」

祐奈：「どういうこと？」

のどか：「実は・・・」

のどかが言うには、

翔：「馬鹿かアイツ等、そんな根もはも無い噂に惑わされやがって。」

祐奈：「ははは、確かに。」

祐奈も苦笑いをしている

翔：「しゃーない、俺が助けに行く。祐奈達は委員長達に報告しておいてくれ。」

祐奈：「オッケー。」

ハルナ：「翔君、一人で大丈夫なの!？」

翔：「まあ、何とかなるだろう。馬鹿共が向かった場所の地図はあるか？」

のどか：「は、はい。これです。」

俺はのどかから地図を貰った

翔：「サンキュー。じゃあ、行って来るわ。」

俺はバックに臨時の食料を詰め、リングとボックスを服に入れると、図書館島に向かった

〈図書館島〉

翔：「さて、図書館島は宝の山であり、トラップの山だって聞
てるからな。鬼が出るか蛇がでるか、パンドラの箱ならぬ、パ
ンドラの島だな。」

俺は右指に3、左指に4つ、系7個のリングを嵌めた

翔：「ここは、こいつの出番だな。」

俺はボックスを服から取り出すと、雨のリングに炎を灯し、ボ
ックスに注入した

翔：「開匣！」

ボックスから、小次郎と次郎が出てきた

翔：「次郎、この臭いの主がどこにいるか解るか？」

俺はネギが作ったプリントを次郎にかがせた

次郎：「クン、クン・・・！ワン！！」

翔：「見つけたか、案内してくれ！！」

次郎：「ウオン！！」

俺は次郎の後を追うように歩いた。途中、トラップが襲い掛かっ
てきたが、時雨金時で全て叩き斬って進んだ。後で聞くと、明日奈
達が2時間で辿りついた部屋に、俺はたった1時間でたどり着いた

翔：「ここか。」

俺はネギ達が本を探しに来た場所に着くと、大きな穴を発見した

翔：「なんだ、この穴は？・・・次郎、アイツ等の足取りわかるか？」

俺が次郎に聞くと、首を横に振っていた

翔：「つとになると、アイツ等はこの穴に落ちたって事になるな。」

時計を見ると、深夜1時を過ぎていた

翔：「少し、寝てから行くか。次郎、ごくろうさん。ゆっくりと休んでくれ。」

俺は次郎をボックスに戻し、持ってきた寝袋を取り出すと、中に入り、寝た

〽翌日の朝〽

翔：「ふあゝあ、よく寝た。」

俺はセットしていた目覚ましで起き上がった

翔：「さて、行きますか。」

軽い朝食を取った後、俺は穴から地下に降りた

翔：「……………長いな。」

俺は正直驚いていた、何かって？地下にたどり着くまでにだよ

翔：「どこまで、続いてるんだ？案外地球の中心まであったりしてな。」

そんな冗談を言っていると、光が見えた

翔：「どうやら、ゴールに着いたみたいだな。」

大空のリングに炎を灯し、Xグローブの入ったボックスに炎を注入して取り出し、装着すると、グローブから炎を噴射し、落下の勢いを無くし、地面に着地した

翔：「随分と広いな。地下空間ってどこか？」

Xグローブをボックスに戻し、当たりを見回した

翔：「さて、木乃香達でも、探しますか。」

その場を離れようとしたとき、遠くから轟音と水柱が見えた

翔：「……………あそこか、つか何をどうやったら水柱があがるんだ？」

俺は晴れの炎で活性した脚力で、水柱のあがった場所に跳んだ

翔 s i d e e n d

木乃香 s i d e

ウチ等は、この地下空間でネギ君に勉強を教えて貰うていた。
休憩時間に入り、水を浴びていると、湖の中から、昨日見たゴーレムが出てきた

石像：『フオフオフオー』

石像がうちのことを捕まえた

明日奈：「木乃香！！」

ネギ：「木乃香さん！！」

古：「今助けるある。」

クーちゃんと楓ちゃんが、ウチのことを助けてくれようとした時、
ウチを掴んでいた石像の腕に日本刀が刺さった

石像：『フオ！？』

「っえ！？」

そして、上から誰かが降りてきて、腕に着地すると、日本刀を掴み、

「はぁぁぁあつ!!」

石像の腕を両断した

腕を両断され、ウチを掴んでいた手が緩み、ウチは水に落ちた

木乃香：「きゃぁぁあ!？」

だけど、水に落ちる前に誰かがウチのことを受け止めてくれた。
恐る恐るその人の顔を見ると、そこには、ウチの好きな人、翔君がおった

木乃香 s i d e e n d

翔 s i d e

水柱のあがった場所にたどり着くと、ゴーレムが木乃香を捕まえていた。俺はボックスから時雨金時を取り出すと

翔：「時雨蒼燕流 攻式三の型・遣らずの雨！」

時雨金時をゴーレムの腕めがけて、蹴った

石像：『フオ！？』

「つえ！？」

全員が驚いていたが、俺はそれを無視して、ゴーレムの腕に着地し、突き刺さっている時雨金時を握り、ゴーレムの腕を両断した

斬られた腕に捕まっていた木乃香は解放され、水に落ちた、俺は木乃香が落ちる場所に移動して、木乃香をキャッチした

木乃香：「翔君なん？」

俺に抱えられている木乃香が俺に聞いてきた

翔：「ああ。大丈夫だったか？」

木乃香：「うん。」

返事をし、木乃香は今、自分が俺に抱えられている事に気づき、顔を赤くした

翔：「どうかしたのか？顔が赤いけど。」

木乃香：「な、何でもないえ／＼／」

翔：「そうか。」

俺は明日奈達のところへ移動すると、木乃香を地面におろした

ネギ：「翔さん、どうして此処にいるんですか!？」

ネギが質問をしてきた

翔：「お前らを助けに来たからに決まってるだろう?それよりお前ら、取り合えず服を着ろ。・・・目のやり場に困る。」

俺の言葉を聴くと、明日奈達は自分の体を見、上半身がタオルだけの事に気がつき、急いで服を着た

翔：「取り合えず、此処から出るぞ。」

明日奈：「で、どこを探しても出口が見つからないのよ。」

翔：「滝つぼの裏に階段があった、多分そこから、地上にいける筈だ。行け!!」

俺は立ち上がったゴーレムをにらみ、明日奈たちにそういった

ネギ：「だ、だめです。生徒をおいて逃げるなんて。」

だが、ネギは納得しなかった

翔：「あほ、戦えない奴が偉そうなことを言っな。明日奈、この馬鹿をつれて早く行け。」

明日奈：「う、うん。」

ネギ：「あ、明日奈さん、離してください。」

石像：『ま、待つのだじゃ〜。』

石像が逃げ出した明日奈たちを追おうとしたが、

翔：「悪いが、お前の相手はこの俺だ!!」

俺が進路に立ち塞がった

翔：「さて、じじい。覚悟は出来てるんだろうな？」

石像：『フオっ!?!』

翔：「演義をするんだったら、口調を変えたほうが良いぜ。」

俺はボックスから小次郎を出した

翔：「行くぜ、時雨蒼燕流 スコントロ・ディ・ローンディネ 特式十の型・燕特攻!!」

小次郎を前に進ませ、その後を追うように、剣を振り回しながら移動し、ゴーレムを切り刻んだ

石像：『フオーーーーーッ!?!』

翔：「時雨蒼燕流は完全無欠、最強無敵だ!!」

俺はゴーレムの駆逐を完了すると、明日奈達を追った。階段で最上階まで移動すると、エレベータが見え、その中で、明日奈達が固

まっていた

翔：「何やってんだ？」

俺が質問すると

ネギ：「重量オーバーといわれ、そしたら皆さんがこうなってしまったんです。」

翔：「成る程。」

よく見ると、まき絵が大きな本を持っていた。俺はそれを奪い、下に投げ捨てた

「あああゝっ!!」

全員が驚いていると、エレベーターが閉まり、動き出した

明日奈：「どうして、本を捨てたのよ!!」

翔：「あの本が原因でエレベーターが動かなかったんだよ。」

夕映：「ですが。」

翔：「あのなあ、持っていないと頭が良くなならない本を持って試験を受けるきか？」

「・・・っあ!!」

俺の言われ全員が確かにつて顔をしていた

翔：「取り合えず、本に頼らないで勉強しな。」

地上に着き、全員が寮に戻った。俺は疲れていたのもそのまま寝た

試験は遅刻組みの採点をじじいがしており、遅刻組の点数をクラス全体に合計し忘れたと言いその場で全員の平均点を発表した

結果は、このか、のどか、ハルナの三人は何時も通り好成績、そしてバカレンジャーも大幅に平均点を上げていた

こうして2 - Aは最下位から脱出し、最下位から脱出させた事により、ネギは正式な教師となった。っえ？俺の平均点？俺の平均点は100点ですが。何か？

第8話

3人称 side

ある夜、一人の少女が、暗い道を走っていた。そして、後ろから迫る、魔の手に掴まってしまった

「いや。」

「悪いが貴様の血を少し、貰うぞ。」

黒い影は少女に襲い掛かった

「いやー！ー！ー！」

影が少女を覆い、少女から離れると、少女は眠ってしまった

「（ようやく、ようやくこの時が来た。）」

影は空に浮かんでいる月を見上げた

「（ネギ・スプリングフィールド。長い間、貴様の父に閉じ込められた報いを受けてもらうぞー！）」

月の光が影を照らすと、そこにはエヴァンジェリンが立っていた

エヴァ：「クックククク・・・ハッハッハッハッハッハッ」

そして、遠くからその光景を見ていた二つの影があった

翔：「・・・・・・・・」

裕奈：「・・・何もしないでいいの、翔？」

椎名翔と明石裕奈である

翔：「エヴァさんには手出し無用って言われているからな。」

裕奈：「でも、それはネギ君を助けることに関してでしょう？」

翔：「確かにな。・・・取りあえず、まき絵に晴れの炎弾丸を撃つておけ。早く回復するはずだ。」

裕奈：「うん。」

裕奈は晴れの炎の銃弾をまき絵に撃った

翔：「さて。この試練をどうやって解決するか。見させてもらうぜ、ネギ。」

翔は今、のんきに寝ているネギにエール？を送った

翌日、クラスの身体測定をおこなっているとき、亜子がまき絵が桜通りで倒れている所を発見し、クラスの皆に報告に来た。ネギは貧血と判断して、クラス全員を教室に戻らせた

エヴァ：「助けられたのに、助けないとは薄情な奴だな。」

翔が屋上で寝ていると、エヴァンジェリンが話しかけた

翔：「あんたが手出し無用って言ったんだろっ？」

エヴァ：「つぶ、そうだったな。」

翔の解答にエヴァンジェリンは少し笑って答えた

エヴァ：「今日の夜私は、坊やに軽い挨拶をするつもりだ。解っているだろうが、手を出すなよ？」

翔：「解ってるよ。・・・だけど、裕奈の訓練の報酬が手を出すなとはね。」

エヴァ：「力を封印された状態で貴様と戦うのは無謀だからな。」

翔：「高畑先生やじじいが出てくるかもしれないんだぜ？」

翔が言うと

エヴァ：「それは無い。どうやら、じじいは坊やの修行の為に、私を使うつもりのようだからな。」

翔：「・・・何を考えてるんだあのじじい？」

エヴァ：「・・・何も考えていないのかもしれないかもしれんぞ？」

翔：「取りあえず、やり過ぎないように。限度をすぎれば、俺も動かさせてもらう。」

翔はエヴァンジェリンにそう言った

エヴァ：「覚えておこう。」

そう言つと、エヴァンジェリンは屋上を去った

そして夜

エヴァ：「27番、宮崎のどか。貴様の血を分けてもらうぞ。」

エヴァンジェリンがのどかに襲い掛かろうとしたとき

ネギ：「待てー！ー！！」

ネギが杖に乗ってこっちにきた

ネギ：「僕の生徒に、何をするんですかーっ！！ラス・テル・マ・ス
スキル マギステル 風の精霊11人、縛鎖となりて、敵を捕まえ
ろ！魔法の射手 戒めの風矢！！」
サキタ・マギカ アエール・カフトウ・ラエ

エヴァ：「（一般人の前だとゆうのに躊躇なく魔法を使うか）氷
クシオ
楯！！」

エヴァンジェリンはフラスコを投げ、障壁を発動し攻撃を跳ね返した

ネギ：「僕の魔法を全部跳ね返した！？」

エヴァ：「驚いたぞ、凄まじい魔力だな・・・」

ネギ：「えっ！？き、君はウチのクラスの・・・エヴァンジェリン
さん！？」

エヴァ：「フフ・・・新学期に入ったことだし、改めて歓迎のご
挨拶と行こうか、先生。・・・いや、ネギ・スプリングフィールド。
10歳にしてこの力・・・さすがに奴の息子だけはある」

その後、エヴァンジェリンはネギに魔法使いには良いもの悪いもの
のがあると説明し、逃亡した。ネギはこっちにきた明日菜と木乃香
にのどかを頼み、エヴァンジェリンを追った

少し離れた場所

裕奈：「本屋ちゃん、大丈夫かな？」

翔：「血は吸われてない。気絶しただけだから大丈夫さ。」

翔と裕奈は昨日と同じでその様子を眺めていた

翔：「さて、俺はネギとエヴァさんの後を追うけど、裕奈はどうする？」

裕奈：「うん、私は木乃香と本屋ちゃんが心配だから、二人の所に行くよ。」

翔：「そうか。じゃあ、また後でな。」

翔は裕奈と別れ、ネギとエヴァンジェリンを追った。二人に追いつくと、茶々丸がネギを捕まえており。エヴァンジェリンがネギの血を吸おうとしていた

明日菜：「コラーツ！この変質者ども　っ！！」

エヴァ：「・・・ん？」

明日菜：「ウチの居候に何すんのよ　っ！！」

茶：「あ・・・」

エヴァ：「はぶうつ」

明日菜のけりがエヴァンジェリンの顔にヒットし、吹き飛ばされた

エヴァ：「か、神楽坂明日菜！！」

明日菜：「あつ、あれー？あんた達ウチのクラスの・・・ちよつ、どーゆーことよ！？ま、まさかアンタ達が今回の事件の犯人なの！？しかも二人掛かりで子供を虐めるような真似して　　答えによつてはタダじゃ済まないわよ！」

エヴァ：「ぐつ、よく私の顔を足蹴にしてくれたな神楽坂明日菜・・・お、覚えておけよ！！」

エヴァジェリンと茶々丸はその場を離れた

翔：「派手にやられたな。」

エヴァ：「翔、貴様見ていたのか？」

翔：「一応。」

エヴァ：「笑えたければ、笑え。」

翔：「・・・笑う要素が見つからないんだが。」

エヴァ：「まさか、あのような小娘に私の障壁を突破されるとは不覚だ。」

翔：「確かにあれには驚いたな」　　原作を忘れてきてる人

エヴァ：「だが、坊やにはまだパートナーがいない。次こそは血を吸い尽くしてやる。」

エヴァンジェリンの笑い声が夜の麻帆良に響いた

第9話

翔 side

エヴァさんがネギに挨拶（戦い）をした、数日後、俺は風呂場に向かっていた

翔：「うん？やけに風呂場がうるさいな、この時間帯は俺とネギしかないはずだが？」

脱衣所に入り、俺は風呂場が騒がしいことに気付いた

翔：「まあ、気にするだけ無駄か。」

俺は服を脱ぎ、腰にタオルを巻いて、ドアを開けた。すると、

翔：「はっ？」

そこには、明日菜、裕奈、刹那、真名以外のクラス全員とネギがいた。しかも裸で

翔：「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

ネギ：「え〜と、その。」

翔：「……何やってるんだ、お前等？この時間は、俺とネギの入浴時間なんだが？」

「え」と。

全員が答えられないでいた

翔：「俺が嫌いなことを知っているか？それは、のんびり出来る風呂の時間を邪魔されることだ。」

俺は殺気を少し解放した。その衝撃で、タイルに少しひびが入った

翔：「出て行け！！」

「はい……！！」

俺にビビッて全員が風呂から出て行った。ただ一人を除いて

翔：「……何で、残ってるんだ木乃香？」

木乃香だけが残っていた

木乃香：「久しぶりに、翔君とお風呂に入りたいなーっと思ってるな。」

木乃香が笑顔で言った

翔：「はあ。」

俺はため息をついた

翔：「（刹那と裕奈にばれたら、殺されるな。確実に。）」

俺が心でそう思っていると、近づいてくる気配を感じた

翔：「・・・そこ!」

俺は近くにあった洗面器を取り、近づいてくる、何かを撃退した

木乃香：「翔君、今の何なん?」

翔：「さあ?」

ネギ：「翔さん、凄いです。」

ネギは目をキラキラさせて俺を見ていた

木乃香：「つくしゅん。」

木乃香がくしゃみをした

翔：「木乃香、風引くから、風呂に浸かれ。」

木乃香：「でも、ええの?」

翔：「風を引かれるよりはましだ。」

そう言って、俺は湯につかった

その後、3人でのんびりしながら、風呂に入り、色んな話をした

翌日、木乃香と風呂に入ったことが裕奈と刹那にばれ、俺は一日中二人から逃げまわった

翔：「俺のせいじゃ、ないんだがな！。」

第10話

3人称 side

今、翔は裕奈と一緒に帰ってる。この数日で変わったことがあれば、ネギにペットが出来たくらいだ。そのペットに違和感を感じた翔は、エヴァジェリンに質問すると、あれはオコジョ妖精言つものらしい。取りあえず、害はなさそうなので放っておいた

裕奈：「うん？ねえ、翔。アレってネギ君と明日菜じゃない？」

翔：「そうだな。」

帰り道、翔と裕奈はここそと隠れている二人を見つけた

翔：「何やってるんだあいつ等？」

裕奈：「さあ？」

翔と裕奈は二人が何をやっているのか気になり、後を追った

離れた場所で見ていると、どうやら茶々丸を追っており、人けの無い所に入ると、戦闘を開始した

翔：「成程、パートナーを潰す作戦に出たってところか。・・・だけど、これはネギが考えた作戦じゃないな。」

裕奈：「どういうこと？」

翔：「あの、ネギがこんなことを考え着くとは考えにくい。多分、あのオコジヨが作戦を考えたんだろうな。」

裕奈：「ふん。って！？あれ、まずいんじゃない！？」

裕奈に言われて見ると、ネギが魔法の矢を茶々丸に放った

翔：「おい、おい。裕奈！！」

裕奈：「任せて、来たれ（アディアット）！！」

翔の意思が解った裕奈はアーティファクトを呼び出し、嵐のリングに炎を灯し、矢と同じ数の弾を撃ち、矢を全て撃ち落とした

ネギ：「つえ！？」

明日菜：「な、何なの！？」

茶：「今の銃弾は・・・」

翔は裕奈を抱え、瞬動で戦いの場に移動した

茶：「椎名さん、裕奈さん。」

ネギ：「翔さん！？」

明日菜：「裕奈！？な、何で二人が此処にいるのよ！？」

翔：「二人が誰かを追っているのに気が付いてな。追いついてみれば、案の定この騒ぎだ。」

カモ：「やいやい、てめえら。さては、エヴァンジェリンの仲間だな。」

裕奈：「オコジヨが喋った。」

翔：「うるせえな、少し黙ってる。」

翔はオコジヨに殺気を与えた

カモ：「っひい!？」

翔：「さて、ネギ。此処が戦場なら、俺はどうこう言わねえ。だがな、此処は学校で、茶々丸はお前の生徒だ。生徒を傷つける先生がどこにいるんだ？」

ネギ：「そ、それは。」

カモ：「黙って聞いてれば、てめえには関係ねえだろう。」

ネギが黙っていると、オコジヨが再び騒ぎ出した

翔：「俺は今、ネギと話しているんだ、部外者は黙ってる。」

カモ：「部外者じゃねえ。俺たちは兄貴の・・・」

翔：「うるせえな。」

翔は嵐のリングを取り出し、指にはめ、炎を灯し、匣に炎を注入した

翔：「開匣」

ボックスが開き中から、猫が出てきた

翔：「嵐猫Ver.X」
ガット・テンベスタ

瓜：「にゃあああつ！！」

ネギ：「猫？」

明日菜：「か、かわいい。」

翔：「瓜、あのオコジヨ食ってきていいぞ。」

翔がオコジヨを指差すと

瓜：「にゃあああ！！」

瓜はものすごいスピードでオコジヨに向かって行った

カモ：「つな！？兄貴、助けてください。」

オコジヨはネギに助けを求めたが、目の前には瓜が迫ってきていた

カモ：「ひiiiiiiiiii」

オコジヨはものすごいスピードで逃げて行った

ネギ：「カ、カモ君!？」

翔：「さて、餓鬼を殴るのは気が進まないが・・・お仕置きをさせてもらつぜ、ネギ」

ネギ：「え？」

翔：「開匣!!」

翔は新たなボックスを取り出し、大空の炎を注入し、Xグローブを装着した

翔「構えろ、ネギ。ちょっとばっかし、稽古をつけてやるよ。」

ネギ：「っ!!」

ネギは急いで杖を構えた。そして

ネギ：「け、契約執行15秒間!ネギの従者『神楽坂明日・・・』
っがはっ!？」

翔：「遅い!」

翔は大空の炎のスピードを使い一瞬でネギの懐に入り、掌底を繰り出し、ネギの詠唱を止めた

明日菜：「ネ、ネギ!？このー」

明日菜は翔に蹴りを入れようとしたが、足元に銃弾が撃ち込まれ

止まってしまった

裕奈：「明日菜の相手は私だよ。」

明日菜：「裕奈！？邪魔しないで！！」

明日菜は裕奈に蹴りを入れようとしたが

裕奈：「遅い、遅い。」

裕奈は余裕で、その蹴りをかわし、雨のリングに炎を灯し、青の弾丸を明日菜に撃ち込んだ

明日菜：「つつ、裕奈！？」

裕奈：「大丈夫、痛くないから。」

明日菜：「そう言えば、痛みを感じない。だけど、体がふらふらする。」

裕奈が明日菜に撃つたのは鎮静の効果を持つ雨の炎の銃弾である

裕奈：「明日菜は此处で見てるといいよ。」

ネギ：「魔法の矢 連弾・光の40矢！！」

翔：「っし。」

翔は前に炎の壁を作り、魔法の矢を全て防いだ

ネギ：「そ、そんな。」

翔：「よそ見をしている暇はないぞ。」

翔は矢を防いだ瞬間、ネギの後ろに移動していた

翔：「せいっ！！」

翔はネギの腹に手を当て、剛の炎を撃ちこんだ（10%の力で）

ネギ：「うあっ！！」

ネギは吹き飛び、地面を転がった

翔：「もう、終わりか？」

ネギ：「ま、まだです。」

ネギは何とか立ち上がろうとしていた

翔：「その、気持ちがあれば十分だ。」

ネギ：「っえ？」

翔：「ネギ、10%しか力を発揮していないが、俺の力はエヴァさんとほぼ互角だ。その俺に、お前は恐怖しながらも、勇気をだして戦った。その気迫があれば、大丈夫だ。」

ネギ：「翔さん。」

翔：「怖がつて無いで、前に一步踏み出せ。そうすれば、今まで見えなかったもんが見えるかもしれないぞ。」

翔はそう言つて、ネギに近づき、晴れの炎をネギに当て、ネギの怪我を治した

瓜：「にやあああ。」

怪我を治し終わると、瓜がオコジヨを加えて戻ってきた

翔：「瓜、そいつはまずいから、捨てな。後で魚を食わしてやるから。」

瓜：「にやああ」

瓜はオコジヨを離し、翔の肩に、乗つかった

翔：「裕奈、戻るぞ。」

裕奈：「うん。」

翔：「じゃあな、ネギ。頑張れよ。」

翔はネギの頭を撫でて、その場を後にした

翔：「茶々丸。悪いけど、エヴァさんにはこのこと内緒にしてい
てくれ。」

茶：「解りました、マスターには内密にしておきます。」

翔：「サンキュー！」

第11話

3人称 side

カモ：「だから、此処はもう一度、あのロボットに奇襲をかける
しかりやせん。」

明日奈：「何度も同じ手にかかるわけ無いでしょうが!!」

ある休日、明日奈達の部屋でカモ、明日奈は作戦を立てていた。
一方ネギは

ネギ：「……………」

翔：『怖がつて無いで、前に一步踏み出せ。そうすれば、今まで
見えなかったもんが見えるかも知れないぞ。』

ネギ：「……今まで見えなかったものか。」

ネギはこの間、翔に言われた言葉を思い出していた

ネギ：「……………よし。」

ネギは立ち上がり、部屋を出た

明日奈：「ネ、ネギ!？」

カモ：「あ、兄貴!？」

明日奈とカモは出て行ったネギの後を追った

翔の部屋

翔：「があく。」

ナッツ：「ガウ、ガウ・・・」

祐奈：「zzzzzzzz・・・」

翔、祐奈、ナッツの2人+1匹は昼寝をしていた。この3人、今日は何をしようかと考えていた所、ナッツが昼寝を始め、それを見ているうちに翔と祐奈も寝てしまった

のんびり寝ていると、ベルの音が鳴った

翔：「んあ？客？一体誰だ。」

ベルの音で目が覚めた翔は、玄関に行き、ドアを開けた

翔：「どちらさま・・・って、ネギに明日奈じゃねえか。どうしたんだ？」

ドアの前にはネギと明日奈が立っていた。（カモはカウントに入っていない）

ネギ：「少し、お話があるんですが、いいですか？」

翔：「・・・まあ、良いだろう。あがんな。」

翔は2人を部屋に入れた

明日奈：「って、なんで祐奈が此処に居るのよ！？っーか寝てるし。」

部屋に入ると、祐奈が居た事に驚いていた

翔：「昼寝をしていたんだよ。っで、話ってなんだ？」

翔が聞くと

ネギ：「翔さん、ぼ、僕を鍛えてください。」

ネギが頭を下げて、言った

ネギ：「このままじゃ、エヴァンジェリンさんには勝てません、ですから。」

翔：「だめだ。」

ネギ：「ど、どうしてですか!？」

翔：「俺は中立の立場なんだよ。それに、よっぽどの事が無い限り、俺は手を出さないってエヴァさんと約束しているからな。」

明日奈：「ばれなきや問題ないでしょうが。」

翔：「それに、たった数日鍛えたぐらいで、勝てるわけねえだろうが。」

ネギ：「っうー!」

翔：「取り合えず、今ある魔法で頑張れ。」

ネギ：「は、はい。」

ネギは落ち込んでいた

翔：「（はあ、しょうがねえ）ネギ、弱い奴が強い奴に勝つにはどうすればいいと思う?」

ネギ：「え!? えーと、誰かに頼る事ですか?」

翔：「それもあるが、もう1つは、策を練ることだ。」

ネギ：「策、作戦のことですか?」

翔：「そうだ。今、自分にある技、武器等を並べて、策を考える、ここはこうして、もしこう来られたら、こういう風に対処する。頭がいいお前ならどうにかなるんじゃないか?」

ネギ：「・・・っ!! 翔さん、ありがとございます。僕、頑張ってみます。」

ネギは翔に礼を言うと、急いで、部屋に戻った。カモと明日奈は

慌ててネギの後を追った

祐奈：「ネギ君、元気になったね。」

翔：「何だ、おきてたのか。」

ネギ達が帰ると、祐奈が翔に声をかけた

祐奈：「うん。それより、良かったの？ネギ君のこと助けて？」

翔：「少し、アドバイスをやっただけさ。アレを聞いてどうするか、ネギ次第さ。」

祐奈：「ねえ、エヴァちゃんが動くとしたら、いつだと思っ？」

翔：「……これは、俺の感だが、麻帆良学園全体で電気を止める日があるだろう？」

祐奈：「うん。」

翔：「恐らく、その日に仕掛けるんじゃないか？」

祐奈：「時間はそんなに無いね。」

翔：「ああ。その限られた時間の中でネギがどんな策を作るかが勝敗の分け目だな。」

第12話

翔 side

ネギが俺に相談をしてきてから、5日後。今日は麻帆良学園の大停電の日だ

翔：「つで、やっぱり、ネギと戦うつもりなのか？」

エヴァ：「当然だ。この忌々しい呪いを解除できる日をどれだけ待っていたと思う。」

俺は屋上でエヴァさんと話している

翔：「やり過ぎるなよ。」

エヴァ：「解っている、私も貴様の拳の餌食になりたくは無いらな。」

翔：「そんなに、警戒する必要もないだろう？」

エヴァ：「何を言っている、貴様の本気の一撃は障壁をいとも簡単に破るんだぞ、さすがの私もアレを喰らったときは死ぬかと思っただわ。」

翔：「そうかね。」

「
エヴァ：「まあいい。私は帰らせてもらっぞ、準備があるからな。」

そういうと、エヴァさんは入り口で待機していた茶々丸をつれて屋上を後にした

翔：「…………この五日間、お前が何をしていたか、そして、どんな策を考えたのか、楽しみにしているぜ、ネギ。」

俺は弟分にエールを送った

翔 s i d e e n d

3 人称 s i d e

夜になり、麻帆良全体の電気が消えた。エヴァンジェリンはネギをおびき寄せるために、まき絵、亜子、アキラの3人を操り、女子寮の大浴場でネギを待っていた

ネギ：「エヴァンジェリンさん、どこですか、まき絵さんを解放してください。」

ネギが大浴場に入ってきた

エヴァ：「ここだよ、ボウヤ。」

月の光がエヴァンジェリン、茶々丸、まき絵、亜子、アキラの4人に当たった

エヴァ：「1人で来るとは見上げた勇氣だな。」

ネギ：「この戦いに他の人は巻き込まないと決めましたから。」

エヴァ：「（ほう、数日前よりましな顔になったな。）まあいい、決着をつけてボウヤの血を存分に吸わせてもらう。」

ネギ：「・・・もし、もし、僕が勝ったら悪い事はしないって約束してくれますか。」

ネギは静かに聞いた

エヴァ：「約束しよう。正し、勝てただけだな。行け！！」

エヴァンジェリンの合図でまき絵、亜子、アキラの3人がネギに襲い掛かった

ネギ：「エーミットム解放、フランス・エクセルマティオ風花・武装解除！！」

ネギはあらかじめ、用意していた魔法を解放しアキラと亜子の服を弾き飛ばした

ネギ：「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 大気よ水よ（ア
ーエール・エト・アクア）白霧となれ（ファクタ・ネブラ）彼の者
等に（フィク・ソヌム）一時の安息を（ブレウエム）眠りの霧！
ネブラ・ヒュプノテイカ

「！」

そして、3人の包囲網から抜け、眠りの魔法で、2人を眠らせた

エヴァ：「（前より詠唱のスピードが上がっている！だが、）リ
ク・ラク・ラ・ラック・ライラック 氷の精霊^{セブテンデキム・タビサアモリス}17頭集い来りて（
コエウンテース）敵を切り裂け（イニミクム・コンキダント）！！」

ネギ：「っ！！」

ネギは此処ではまずいと判断し、離れようとした

エヴァ：「魔法の射手 連弾・氷の17矢（サギタ・マギカ セ
リエス・グラキアーレス）！！」

エヴァンジェリンの放った魔法の射手が浴場の窓を破り、ネギは
そこから外に出た

追ってくる、矢は持っていた銃で撃ち落した

ネギ：「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 光の精霊^{ウンデキム・スピリトウス・ル}11柱
集い来りて敵を射て（コエウンテース・サギテント・イニミクム）
！！魔法の射手 連弾光の11矢^{サギタ・マギカ セリエス・ルーキス}！！」

ネギは魔法の矢をエヴァンジェリンと茶々丸に放った

エヴァ：「氷盾^{リフレクシオー}！！」

エヴァンジェリンは試験管を投げて盾を作り、攻撃を跳ね返した

デフレクシオ
ネギ：「風盾！！」

ネギは風の盾を作り、矢を防いだ。そして、近づいてくるまき絵のりボンを避け眠りの霧で眠らせた
ネフラ・ヒュフノテイカ

エヴァ：「本当に前とは別人のようだな。一体何があった？」

茶：「恐らく、翔さんにアドバイスを貰ったのかと思います。」

エヴァ：「確かにボウヤの性格からして奴に頼みそうだな。まあ、奴には戦闘に関わるなとしか言っていないからな。アドバイスぐらいなら問題ない。茶々丸、残り時間は？」

茶：「停電復旧まで、後73分です。」

エヴァ：「なら、そろそろ決着をつけるか。」

さらに上空

祐奈：「ほえ、中々やるねネギ君。」

翔：「関心するのはいいが、あんまり暴れるな。落ちるぞ。」

ナッツ：「ガウ。」

祐奈：「ごめん、ごめん。」

上空で、翔、祐奈、ナッツがエヴァンジェリンとネギの戦闘を見ている。祐奈はまだ飛べないので、翔の背中にしがみ付いている。祐奈がしがみ付いているが、あまり表情を崩さない翔、だが、心の中では

翔：「（せ、背中に二つにふくらみが当たってる。つか、中学生でこの大きさはないだろう！？冷静だ、冷静になるんだ俺。）」

っと、かなり慌てていた。その頃、祐奈は

祐奈：「（む、これだけ当ててるのに、表情1つ変えないなんて。うーん、もっと強くしがみ付いたほうがいいのかな？）」

戦闘中に何を考えているんだ、このふたりは by 作者

翔・祐奈：「（うん？今、変な声が聞こえたような？）」

その後、橋におびき寄せられたエヴァンジェリンはネギの仕掛けた罠に掛かり、動けなくなったが、結界解除プログラムで結界を破り、ネギを追い込んだ

その後の展開は原作とおりです by 作者

翔：「しかし、くしゃみで逆転勝ちって。あんなのありか？」

祐奈：「ありなんじゃない？」

翔：「まあ、いい。帰るか。・・・！？」

翔は帰ろうとしたが、エヴァンジェリン達の周りに転移魔方陣が

展開された

翔：「（エヴァさんはもう魔力が無い。それに、ネギにいたっては素人だ。）っち、祐奈、しっかり捕まってるよー!!」

祐奈：「う、うん」

翔は両手の掌から炎を噴射して地上に向かった

茶：「マスターー!!」

エヴァ：「っちい、こんな時に。」

エヴァンジェリン達の周りには、大量の下級の鬼と一体の上級の鬼がいる

明日奈：「な、何なのよこれは。」

ネギ：「エヴァンジェリンさん、どうするんですか?」

ネギがエヴァンジェリンに質問した

エヴァ：「問題ない、あいつが来るだろうからな。」

明日奈：「アイツ?」

そして、数体の鬼がネギたちに襲いかかろうとしたとき

ナッツ：「GAOOOOOOO!!」

何かの雄叫び聞こえ、そして、オレンジ色の波動が鬼に当たり、鬼は石化してしまった

ネギ・明日奈：「い、石になった!？」

そして、上空から翔、祐奈、ナッツが地面に着地した

翔：「貴様らは、此处でかみ殺す!!」

今、麻帆良学園の最強の1人とその従者の戦いの舞が始まる

第13話

3人称 side

翔：「上級クラスの鬼が一体に、下級のクラスの鬼が50体か。結構いるな。」

翔は周りにいる鬼を数えていた

裕奈：「のんびり、数えてる暇はないと思うんだけどな。」

裕奈はすでにアーティファクトを出していた。しかし、その手は少し震えていた

翔：「・・・・・・・・」

裕奈：「しよ、翔!？」

翔は裕奈の手を握った

翔：「大丈夫だ、今までやってきたことを思い出しながら戦え。それに言っただろう？お前を絶対を守って見せるってな。」

翔はいつもと変わらない表情で言った

裕奈：「・・・・・・・・うん!」

翔：「いい返事だ。・・・ナッツ、カンビオ・フォルマ形態変化!!」

ナッツ：「GAO!!」

ナッツが変形し、翔のグローブに装着された

エヴァ：「ほう、本気をだすのか。」

翔：「まさか、出しても5割の力しか出さねえよ。」

「がぁぁぁぁぁ」

痺れを切らした鬼が翔達に襲掛かってきた

翔：「裕奈は下級のクラスの奴だけを相手にしろ、上級はまだ早いからな。」

裕奈：「最初からそのつもりなんだけどね。」

翔：「つぶ、そうか。」

そう言つと、翔は掌から炎を噴射し、鬼に突っ込んだ

「おおおお!!」

鬼の一体が棍棒を翔に振り降ろしてきた。翔は炎の噴射を止め、掌を下に向けると再び炎を噴射し、棍棒をかわした

翔：「はぁっ!!」

更にその状態から、飛び回し蹴りを放ち、鬼を蹴り飛ばした

翔：「Xカノン!!」

そして、右手から大空の炎を弾丸のように撃ち出し、鬼を倒した

「がぁぁぁぁぁ」

その隙について、2体の鬼が後ろから、襲ってきたが

翔：「はぁっ!」

剛の炎を纏った手刀で斬り裂いた

その頃、裕奈は、

裕奈：「ほいっと。」

鬼の攻撃を避けては銃を撃ち、一体、一体確実に倒していた

裕奈：「どんだけいるのよ。」

そう言いながらも、双銃で鬼を撃ち抜いて行く裕奈

裕奈：「数も多いし、一気に決めようかな。」

裕奈は雲の炎を灯した

裕奈：「これで、お終い!!」

トリガーを引き、銃口から細いレーザーのような弾が放たれ、そして物凄い勢いで増殖し、鬼を全て、撃ち抜いた（イメージは未来編で獄寺が使ったもの）

裕奈：「ビクトリー」

裕奈は明日菜達にVサインをした

ネギ：「す、すごい。」

明日菜：「裕奈のあれ、反則じゃない？」

明日菜は裕奈の銃に驚いていた

その頃、翔は

翔：「こいつで、ラスト!!」

剛の炎を纏った右拳で最後の下級ランクの鬼を倒した

翔：「後は、お前だけだな。」

翔は出てきてから一步も動いていない上位クラスの鬼に話しかけた

「お主、その歳で大したもんだな。あれだけの鬼をたった二人で倒すなんて。」

鬼が感心していた

翔：「話せるのか。だったらちようどいい、俺は無駄な戦いをしたくないんだ、引いてくれないか？」

「それが出来たら、わしも苦労はしない。」

翔：「そうか。なら、しかたねえ。」

翔は一瞬で鬼に接近し、剛の炎を纏った拳を放ち、殴り飛ばした

「ぐうお！・・・これは効くのう。」

翔：「効いてる割りには元気そうじゃねえか。」

「そんなことはないぞ？」

翔：「じゃあ、これならどうだ？」

翔は死ぬ気の炎を右手に収束させた。そして、鬼の背後に移動した

翔：「バーニングアクセル！！」

後ろに振り返った、鬼の腹に拳を叩き込み、そして、収束した炎の球体を撃ちだした（イメージはフレイムランブルXX）

「ぬおおおおお！！」

鬼は木に激突した

翔：「まだ、やるか？」

翔は倒れている鬼に聞いた

「やめておこう、どうやらわしの負けみたいだからの。」

鬼の体が消えかけていた

翔：「召喚士に伝えておきな、式神に頼ってないで自分で来いってな。」

「覚えていたら伝えておこう。」

そう言つと、鬼は消えた

翔：「これで、一件落着だな。」

裕奈：「翔。」

裕奈が翔に近づいてきた

翔：「裕奈、怪我はないか？」

裕奈：「ないよ。」

翔：「なら、良かった。」

ネギ：「翔さん。」

ネギたちがこっちにきた

ネギ：「凄いです。あれだけの鬼をたった二人で倒すなんて。」

ネギは目をキラキラさせていた

翔：「サンキュー。つつても、本気になっていないけどな。」

明日菜：「どのくらいの力で戦っていたのよ。」

翔：「5割ぐらいかな。」

明日菜：「あれで、5割って。じゃあ、本気はどのくらいなのよ！？」

明日菜が驚いて聞いた

翔：「さあ、測ったことないから解らん。」

裕奈の初めての戦いは圧勝で終わった。裕奈の戦いを見ていた翔曰く、あの時の裕奈はまるで舞を舞っているようで、凄くきれいだったという

第14話

翔 side

エヴァさんとネギの戦いの翌日、俺とネギは学園長に呼ばれた

ネギ：「えっ！？しゅ、修学旅行の京都行きは中止！？」

翔：「当然だな。」

近衛門：「うむ、京都が駄目だった場合はハワイに・・・」

ネギ：「そ、そんな。」

ネギは壁に手をついた

翔：「お前、そういう、無駄な事器用だよな。」

スローモーションで壁に手をつくネギを見て、呆れた

近衛門：「コレコレ、まだ中止とは決まっとらん。ただ、先方がかなり嫌がっておつてのう。」

ネギ：「先方？京都の市役所ですか？」

翔：「修学旅行に市役所は関係ないと思っただがな。」

近衛門：「うむ、どうやって説明すればいいか。」

翔：「爺さん、ハッキリ言えばいいだろう。関西呪協教会って。」

ネギ：「関西呪協教会!？」

近衛門：「翔君、ハッキリ言い過ぎじゃ。ワシは、関東魔法協会の理事もやつとるんじやが、関東魔法協会と関西呪術協会は昔から仲が悪くてのう……。今年は、魔法先生がいると言ったら、修学旅行での京都入りに難色を示してきおった。」

ネギ：「じゃあ、僕のせいなんですか!？」

翔：「間接的に言えばそうだな。」

俺は頷いた

近衛門：「まあ聞きなさい。ワシとしては、もー喧嘩は止めて西と仲良くしたいんじや。ネギ君には、そのための特使として西へ行つて貰いたい。この親書を向こうの長に渡してくれるだけでいい。」

翔：「爺さん、こんな餓鬼に頼んで大丈夫なのか？」

近衛門：「じゃが、後顧の憂いをなくすために、今こそ西との関係を修復すべきなんじや」

ネギ：「どういふことですか？」

翔：「危険なことがあるかもしれないんだよ。」

ネギ：「ええ〜！？どうしてですか！？」

近衛門：「それはの、道中向こうからの妨害があるかも知れんのだよ。・・・彼らも魔法使いである以上、生徒や一般人に迷惑が及ぶような事はせんじやろが・・・ネギ君には中々大変な仕事になるじやろ・・・。どうするかの？」

ネギ：「分かりました。任せてください、学園長先生」

ネギは真剣な顔で答えた

近衛門：「そうそう、京都と言えば、孫のこのかの生家があるんじゃないが・・・このかに魔法の事はバレとらんじやろな？」

ネギ：「えつと、た、多分。」

近衛門：「ワシはいいんじゃないが、アレの親の方針でな。魔法の事はなるべくバレないように頼む。」

ネギ：「はい。」

近衛門：「では、行ってよろしい。それと、翔君は少し残ってくれるかの。少し話があるんじゃない。」

ネギは学園長室を出て行った

翔：「つで、話ってなんですか？」

ネギの気配が無くなったので、俺は爺さんに聞いた

近衛門：「うむ、明石裕奈君に魔法の事がばれたと聞いてな。」

翔：「・・・そのことか。」

俺は頭を少し掻いた

翔：「正直、俺も裕奈にはこっちの世界に来てほしくなかったんだけど、あいつが自分の意志で決めたことだからな。俺や周りが何を言っても無駄でしょう。」

近衛門：「わしも明石君にそう言った、彼は渋々見とめたがの。」

翔：「今度、謝りにいかないとな。話はそれだけですか？」

近衛門：「いや、もう一つある。修学旅行中、木乃香の護衛を頼みたいんじゃない。」

翔：「護衛って、刹那一人で充分でしょう。」

近衛門：「念を入れておいた方がいいと思ってる。」

翔：「・・・解りました。」

俺はそう言い、学園長室を後にした

翔：「（修学旅行中、無いもおきなきやいいんだけどな。）」

修学旅行の事を考えながら歩いていると

木乃香：「翔くん。」

木乃香がこっちに走ってやってきた

翔：「木乃香、どうしたんだ？」

木乃香：「ちょっと、こっちにきてえくな。」

木乃香は俺の手を掴み、人けの無い、路地裏に連れてきた

翔：「なんで、こんなところに連れてきたんだ？」

木乃香：「翔君、ちょっと目を瞑ってほしんやけど。」

翔：「別に構わないけど。」

俺は目を瞑った。そして、数秒後、俺の頬に柔らかい何かが触れた

カモ：「今だ、仮契約バクテイオー！！」

翔：「（何！？仮契約だと！？）」

俺は目を開け、目を横にずらすと、木乃香が俺の頬にキスをしており、そして、オコジョがいた

木乃香：「ふわあー、手品みたい。いやーん、ウチのカードやー。」

」

木乃香がカードを手を取って見ていた

木乃香：「でも、アスナのと違うやんかー。」

俺が混乱していると、

ネギ：「どうしたんですか？　って、あー・・・や、やっぱりちゃんとキスしなきゃ、ダメなんだー」

ネギとアスナがこっちにきた

翔：「ネギ、一体どういうことだ？」

俺がネギに聞くと

ネギ：「実は・・・」

ネギが言うには、木乃香がアスナのカードを見て、自分も欲しいと言っており、オコジヨがネギに木乃香と仮契約しろと言った。そして、木乃香に仮契約のやり方を言ったら、俺を探しに行った

翔：「・・・・・・・・」

木乃香：「あー、消えてもうた。」

木乃香のカードが消えてなくなった

木乃香：「翔君、もう一回。」

アスナ：「ちょ、落ち着きなさいよ木乃香。」

カモ：「ちつ・・ほつぺただったのかよ・・また、しくじったぜ・
・ちゃんとした仮契約カード一枚につき、オコジヨ境界から仲介料
として5万オコジヨ\$が入るってのによ・・」

翔：「ほう、やはりお前の仕業か。」

俺はオコジヨを掴み上げた

カモ：「だ、旦那!？」

翔：「覚悟はいいか、カモ。」

俺は雷の炎を右手に纏わせた

翔：「くたばれー!!」

そして、カモを地面に叩きつけるように殴った

そして、帰り道

木乃香：「ウチもカード欲しかったなー。・・っ!翔君、今
度二人っきりの時にまたキスしような。」

翔：「っな!?!?!」

俺は顔を赤くした

翔：「（木乃香の笑顔は裕奈と同じで反則だよな。あれ？何で俺こんなにドキドキしてるんだ？・・・まさか、俺、裕奈と同じくらい木乃香の事好きなのか？・・・二股って、俺は犯罪者になっちまったのか！？）」

自分の気持ちに整理がつかないまま、俺は寮に戻った

第15話

翔 side

翔：「おおおお！！」

エヴァ：「はああああっ！！」

俺は今、エヴァさんの別荘で修行というなの、試合をしている

翔：「ふんっ！」

俺は瞬動でエヴァさんの後ろに回りこみ強烈な裏拳を繰り出した

翔：「おおおっ！！」

そして、連続蹴りを放ち、エヴァさんを宙に浮かせ

翔：「おりゃああああっ！！」

左正拳を放ち、エヴァさんを殴り飛ばした

エヴァ：「ぬうううう」

エヴァさんは直に体制を立て直し、詠唱を唱えた

エヴァ：「来れ氷精 闇の精、闇を従え 吹雪け、…闇の吹雪」

襲い来る闇の吹雪を交わし、俺は両手に炎を纏わせた

翔：「機神双獣撃！せいっ！せいっ！！」

俺は炎を獣のような形で打ち出した

エヴァ：「つぶ、遅い。」

エヴァさんはその炎を難なく回避した

翔：「それはどうかな？」

俺はエヴァさんの目の前でそういった

翔：「さっきのは囷、本命はこっちだ！！」

俺はゼロ距離で双獣撃を打ち出した

エヴァ：「つく、闇盾！！」

エヴァさんとはつさに闇の盾を作り、威力を半減した

翔：「はあ、はあ、はあ。」

エヴァ：「ふう、ふう、ふう。」

俺達2人は肩で息をしている

エヴァ：「つぶ、此処までにしておこう。」

翔：「そうっすね。」

今日の試合は引き分けで終わった

エヴァ：「そういえば、貴様は今日から修学旅行だったな。」

翔：「ええ、まあ。」

エヴァ：「私も久しぶりに学園外に行きたいが、呪いのせいで行けないからな。」

翔：「ははは、何かお土産を買ってきますよ。」

俺は苦笑いをした

エヴァ：「そうしてくれると、ありがたい。」

翔：「何事もなく終わるといいんだけどな。」

エヴァ：「ボウヤがいるからな。恐らく一波乱あるだろうな。」

翔：「それもそうなんですけど、嫌な予感がしてならないんだよな。」

エヴァ：「……貴様の感は当たるからな、そう思うのも無理ない。」

翔：「まあ、一応用心はしておきますよ。」

エヴァ：「そうしておけ。」

その後、別荘で一日を過ごし終わると、集合場所の駅に向かった

翔 side end

3人称 side

翔が駅に着くと、他のクラスメイトが既にそろっていた

ネギ：「翔さん、おはようございます。」

ネギが翔に挨拶をした

翔：「ああ、おはよう。」

翔は普通に挨拶をしたが、内心すごくあきれていた

翔：「（…………こいつ、絶対に任務の事忘れてるな。）はあ
」。

翔はため息を着いた

祐奈：「どうしたの翔？ため息なんてついて。」

祐奈がこっちに来た

翔：「何、ネギに少しあきれてな。」

祐奈：「仕方無いんじゃない、ネギ君はまだ子供なんだから。」

翔：「だが、もう少し教師として行動してもらいたいもんだ。」

翔の言葉に祐奈が苦笑いで答えた。少ししたら、新幹線が着たので乗り込んだ

翔：「所でネギ。」

ネギ：「何ですか、翔さん。」

翔：「俺達の班はどうするんだ？エヴァさんと茶々丸が居ないから人数が合わない。」

翔がそついうと

ネギ：「じゃあ、翔さんと刹那さんはアスナさん達の班で、ザジさんは委員長さんの班に行ってください。」

翔：「了解。」

翔と刹那はアスナ達の班に向かった

木乃香：「翔君、せっちゃん同じ班やね。」

翔：「そうだな。」

刹那：「……失礼します。」

刹那は木乃香に何も言わず、どこかに行った

木乃香：「せっちゃん。」

翔：「木乃香、刹那と一体何があったんだ？」

木乃香：「実はな、……。」

木乃香は翔に理由を話した

翔：「成る程、木乃香が溺れたときに助けられなかった事が原因で話さなくなったと。」

木乃香：「うん。うちは昔みたいにせっちゃんと話したいんやけど。」

木乃香が涙目になった

翔：「あきらめないで、話しかける。幸い同じ班だからな、この修学旅行中に昔みたいに話せるようになるといいな。」

木乃香：「うん。」

翔は席に座り、外の景色を見ていると眠気が襲ってきたので眠ってしまった

翔：「ZZZZZZ」

その時、電車が揺れ

翔：「ZZZZZZ」

木乃香：「ひゃっ!!」

翔の頭が木乃香の肩に乗った

アスナ：「ちょっと翔、置きなさいよ。木乃香が困ってるわよ。」

アスナが翔を起こそうとしたが

木乃香：「ええよアスナ。せっかく気持ち良さそうに寝てるのに起こしたらかわいそうやんか。」

アスナ：「でも、さつき。」

木乃香：「いきなりでびっくりしただけだよ。それに、翔君の寝顔を近くで見られるからな／＼」

アスナ：「うん？最後なんていったの？よく聞き取れなかったんだけど。」

木乃香：「何でもない／＼」

その後、車内にカエルが大量発生したが、翔はその騒ぎでも起きず、木乃香の肩で眠っていた

第16話

翔 side

京都に着いた俺達は観光を始めた

翔：「久しぶりの京都だな。・・・っお、八橋！おばちゃん、この八橋3箱頂戴！！」

「まいどありー。」

俺は八橋を買い、歩きながら食べ始めた

木乃香：「翔君、うちにも1つ頂戴。」

祐奈：「っあ、翔、私にも。」

木乃香と祐奈が八橋をくれと言って来たので、普通にあげた。そこで、周りを見ると、委員長、まき絵が落とし穴に落ちた、そして大量のカエルが出てきた

翔：「（これ、妨害ってより、嫌がらせのほうか正しい気がするのは俺だけか？）」

そんな事を考えていると、俺、祐奈、アスナ以外の皆が酒を飲ん

で酔いつぶれてしまった

翔：「（・・・関西の連中は何を考えているんだ？）」

ネギが新田先生に説明している間に、俺、祐奈、しずな先生の3人で、皆をバスに運んだ

旅館に着いた俺達は、それぞれの部屋に向かった。俺は当然1人部屋

翔：「たつく、とんだ一日だったぜ。そう思わないか、ナッツ？」

ナッツ：「ガウ~~~~。」

俺は部屋でナッツを撫でていた

翔：「おっと、女子が入浴する前に入っておかないとな。」

俺は棚からタオルと浴衣を取り出した

翔：「ナッツ、行くぞ。」

ナッツ：「ガウ。」

ナッツが肩に乗ったのを確認すると、俺は大浴場に向かった

翔：「はぁ、こいつは絶景だな。」

体を洗い、露天風呂に入った、俺は月を見ながらそういった。ナツツは大きな洗面器があったので、そこにお湯を入れてそこに入っている

ネギ：「あ、翔さん。」

のんびり入っていると、ネギとオコジヨが入ってきた

翔：「よう、ネギ。お前も来たのか。」

ネギ：「はい。」

ネギは露天風呂に入った、オコジヨも入ろうとしたので、ナツツに頼んで、オコジヨを別の洗面器に入れさせた。その時、オコジヨの体から血が出たが無視した

カモ：「所で兄貴、あの桜坂って奴は絶対に関西のスパイですつて。」

翔：「・・・何の話をしてるんだ？」

ネギ：「実はですね。・・・」 ネギ説明中

翔：「それは100%あり得ないな。」

カモ：「どうしてそんな事が言えるんでい、旦那。」

翔：「だ、旦那？」

カモ：「こっちのほうがちつくりと来るモンで。」

翔：「まあ好きに呼べ。俺は刹那の正確を解ってるからな。とにかく、これ以上刹那を疑うのであれば、カモ、お前を炭にするからな。」

カモに脅しを賭けると、ドアが開き、刹那が入ってきた

翔 side end

3人称 side

カモ：「（まずい、兄貴隠れるんだ。）」

ネギとオコジヨは隠れたが、翔はそのまま動かなかった

ネギ：「（翔さん！？だけど、なんで刹那さんが此処に？）」

カモ：「（兄貴、これは混浴って言うんだよ。それにしても・・・。）」

ネギとオコジヨは刹那の体を見ていた

翔：「（何、女の体をじろじろ見てるんだ、お前等は。）」

ネギ・カモ：「（っは！？）」

刹那：「・・・どうしたものか、魔法使いであるネギ先生ならな

んとかしてくれると思ったのだけど。．．．いつそのこと翔さんに頼ったほうがいいのか？」

ネギ：「（っ！！まさか本当に関西呪協協会のスパイ！？）」

ネギは杖を出し、刹那を一瞬だが敵と認識してしまった

刹那：「っ！！誰だ！！」

刹那はネギの殺気を感じ取り、置いていた夕風を掴み、ネギが隠れている岩に踏み込んだ

刹那：「神鳴流奥義、斬岩剣！！」

刹那は岩を真っ二つに斬った

ネギ：「い、岩を切った！？」

翔：「（ふむ、踏み込みは合格点だな。だけど、太刀筋に迷いがある）」

片方が慌ててるのに対し、もう片方はのんきに刹那の強さを確認していた

刹那：「逃がすかっ！！」

刹那はネギの目の前に接近していた

ネギ：「ラス・テル・マ・スキル・マギスキル 風花・武装解除
！！」

ネギは刹那の刀を弾き飛ばしたが、刹那はそれに構わずネギに近づき、ネギの首を絞めた

刹那：「何者だ、言わねば命は無いぞ。」

ネギ：「あわわわわわ。」

刹那：「つて、ネギ先生？」

カモ：「旦那！兄貴を助けてください。」

翔：「月がきれいだな、ナッツ。」

ナッツ：「ガウ。」

翔とナッツは月を眺めていた

刹那：「翔さん／＼！？」

刹那は自分が今、どんな格好をしているのか気がついた

翔：「取り合えず、これで前を隠せ。」

翔はネギによって飛ばされた刹那のタオルを取り、刹那に渡した

カモ：「や、やいてめえ桜咲刹那！やっぱりめえ関西呪術協会のスパイだったんだな！？」

刹那：「ち、違う。15番、桜咲刹那、一応先生の味方です。」

ネギ：「つへ？」

翔：「だから言っただろう？違っつて。」

翔がそういうと

木乃香：「ひゃああああ〜!？」

ネギ：「この悲鳴は」

翔：「木乃香だな。」

ナッツ：「ガウ。」

刹那：「木乃香お嬢様!？」

ネギ：「お、お嬢様？」

刹那は直に脱衣所に向かった、ネギも慌てて追おうとしたが

翔：「お前は女子の着替えを除く気か？」

翔にそう言われ、緊急停止した

すると、脱衣所のほうで一悶着が聞こえ、大きなサルが木乃香を抱いて出てきた

ネギ：「木乃香さん。」

ネギが助けようとした時

ナッツ：「GAOOOOO!!」

ナッツの調和の咆哮がサルに当たり、サルの動きが少し、止まった

翔：「刹那、後は任せる。」

刹那：「はい！神鳴流奥義、百列桜花斬!!」

無数の花びらの斬撃がサルにヒットし、サルが細切れになった

翔：「はい、そこ!」

翔が洗面器を近くの木に投げると、誰かに当たり、物凄い鈍い音が聞こえた

木乃香：「・・・あ・・・？　せ、せつちゃん。何かよー分からんけど、助けてくれたん？　あ、ありがとう。」

刹那：「あ、その。すいません。」

刹那は顔を赤くして、その場を離れた

木乃香：「あ、せつちゃん。」

翔：「アイツは極度の恥ずかしがりやだからな。取り合えず木乃香、タオルを巻け。目のやり場に困る。」

木乃香：「ふえ、翔君？　っ／／！！見んといて／／／！！」

その後、木乃香はネギとアスナに刹那との関係を話し、そこで
開きになった

第17話

翔 side

風呂から上がった俺は部屋に戻り、ナッツと遊んでいると、何かの気配を感じた

翔：「何だ、この気配は？・・・さっき風呂場を除いていた奴のとは違う。」

立ち上がり、この気配を確認しようとしたら、

ネギ：「待てー！ー！！」

ネギの声が外から聞こえてきた

何事かと思って外を見ると、サルの着ぐるみを着た何者かが木乃香を抱いて逃げていた。それと同時に俺が感じた気配も消えた

翔：「何だったんだ？とにかく、今は木乃香を助けるのが最優先だ！」

俺は着替え、旅館を出ると、ボックスを取りだした

翔：「開匣。」

中に入っているXグローブを装着し、俺は空を飛んで敵の後を追った

翔 side end

3人称 side

アスナ：「このおおおおー!!」

刹那：「お嬢様を返せ!!」

刹那達は着ぐるみを着た女性に追いつき、アスナはネギと仮契約した事で手に入った破魔の剣^{ハリセン}で女性が出した式神と対峙していた。刹那は式神をアスナとネギに任せ、木乃香を助けるために、女性に突っ込んだが

刹那：「っ!!」

女性の後ろから何者かが現れ、ぶつかった

刹那：「つく!?」

「ほえええええ」

刹那は瞬時に受身を取ったが、影は思いつきり、地面を転がった

刹那：「（今の太刀筋は神鳴流のもの。まさか！？敵側にも雇われたのか！？）」

刹那が動揺していると

「けほ、けほ、どうも！神鳴流剣士の月読と言います。」

「ほな、よろしゅう月読さん。」

刹那：「逃がすか！！」

月読：「先輩の相手はうちです。」

月読は刹那に襲い掛かった

刹那：「つく。」

「今のうちに。」

ネギ：「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 風の精霊11人、縛鎖となりて敵を捕らえよ！」

「しもつたあのガキのことすっかり忘れ取った！？」

ネギ：「魔法の射手・戒めの風矢！！」

ネギは魔法の矢を女性に放った

「ひい！？お助け！？」

しかし、女性 は 木乃香 を 楯 に した

ネギ：「っ！？曲 が れー！！」

ネギ は 矢 に 命 令 を 下 し、 曲 が ら せ た

「・・・あら？」

ネギ：「木乃香さんを離して下さい。ひ、卑怯ですよ。」

「っ！！甘ちゃんやな、多少怪我するくらい気にせず打ち抜けばえーのに。全く、この娘は役に立ちますなあ。この調子で利用させて貰うわ。」

「そんな事、させると思つか？」

「へ？」

女性の後ろから声が聞こえ、女性が振り向くと、木乃香を奪われてしまった

「なあっ！？」

翔：「木乃香は返して貰ったぜ。」

木乃香を抱えた翔は、一瞬でネギの所に移動した

ネギ：「翔さん！！」

翔：「遅くなって悪かったな。来る途中、鳥族の式神に襲われてな、倒してたら時間を食った。」

「このガキ、お猿さん、お猿さん、うちを助けてくだはれ。」

女性は新たにサルを二体召喚し、木乃香を奪うよう命令した。だが

翔：「零地点突破初代エディッション」

一瞬で氷付けにされ、砕かれてしまった

月読：「千草はん、此処は一旦引いたほうがええどすな。さすがのうちもあの人が相手やと、勝てる気がしません。」

千草：「つく。」

刹那：「そう簡単に逃げられると思ってるのか！」

刹那が切りかかろうとしたが、刹那の隣に現れた翔が、止めた

刹那：「何故止めるんですか、翔さん!？」

翔：「刹那、お前は1つのことに集中しすぎてる。もっと周りを見る。」

刹那：「っえ？」

翔：「隠れてないで出てこいよ。」

翔がそついうと、

「・・・やれ、やれ。気づかっていたか。」

千草の近くに水たまりが現れ、そこから白髪の少年が出てきた

千草：「新入り。」

翔：「お前か、旅館で俺を見ていた奴は。」

「まさか、気づかれていたとは驚きだよ。僕の名前はフェイト・アーウエンリンクス。始めまして『天空の戦士』椎名翔。」

翔：「・・・俺の名前を知ってるって事は、『魔法世界』出身者か？」

フェ：「まあ、それに近いね。千草さん、此处は引きましよう。彼はかの『闇の福音』と同等の実力者、戦うのは得策ではない。」

そういつと、フェイトは水でゲートを作り、二人をその中に入れた

刹那：「逃がすか!!」

翔：「止めとけ刹那。お前じゃアイツには勝てねえよ。」

刹那が追おうとしたが、翔がそれを止めた

フェ：「椎名翔。近いうちにまた会おう。」

そういつと、フェイトはゲートに入り、消えた

その後、木乃香をつれて旅館に戻った。勿論木乃香は翔に抱えられ（お姫様抱っこ）ていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8015w/>

魔法先生ネギま！～大空の翼～

2011年10月7日03時00分発行